
新米税務調査官尼寺務の奮闘日記

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新米税務調査官尼寺務の奮闘日記

【Nコード】

N8946K

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

僕は尼寺務。H税務署の新人調査官だ。しくじってばかりで落ち込む毎日である。

短編をまとめました。完結済みです。

調査ファイル1 水無月葵探偵事務所の場合

僕は尼寺務。^{あまぐしつむ} H 税務署に配属されて二年目だ。

個人課税部門で、税務調査を主な業務としている。でも、どうも性に合わない。

調査対象の事業主のところに行ってもうまく切り込めず、いつも何も見つけられないまま、調査日程が終了してしまう。

先輩や、上司である統括官にいろいろと指導をされたり、一緒に納税者の事業所へ行ったりするのだが、所謂コツが掴めず、喘いでいた。

「自分はこの仕事に向いていないのではないのでしょうか？」

先輩に言ってみた事がある。すると、

「一年や二年で、そんな結論を出すな。もっと精進しろ」

と叱られた。確かにそうかも知れない。

そんな僕がこの仕事を続けたいと思ったのは、ある納税者との出会いがきっかけだった。

その人の名前は水無月葵。^{みなづき あおい} 時代劇に出て来そうな雰囲気だが、彼女の仕事は探偵。興信所と呼ばれる事の方が多いだろう。

事業規模の割には、多額な所得税を納めていて、相当事業がうまくいっている印象を受けた。

一般的に、税務調査は起業して二、三年では行われる事は少ない。密告や何か特別な情報がない限り、あり得ないのだ。しかし、僕は何か彼女に興味を惹かれ、ダメ元で調査をする事にした。

そして昨年の夏。起業して二年目であるにも拘らず、僕は水無月探偵事務所に調査の連絡をした。申告書には税理士の氏名がないので、自分で作成して提出したようだ。一般的に、関与税理士がいる場合、特別な場合を除いて、調査の連絡は顧問税理士にする。

「お電話ありがとうございます、水無月葵探偵事務所です」

女性の声と言った。僕は高鳴る胸の鼓動を何とか抑えつつ、

「私は、H税務署個人課税部門の尼寺と言います。貴事務所の税務調査にお伺いしたいのですが？」

「まあ、そうですね。まだ仕事を始めて間もないので、いろいろと教えて下さい」

女性の声はとても丁寧だった。僕は更に、

「では日程ですが」

と切り出し、二日間の調査をする事を告げ、電話を切った。

（電話に出たのが、水無月葵さんだろうか？ データだと、今年で二十六歳だな）

声だけでどんな人が判断するのは難しいが、とても知的な女性だと思った。普通税務署から電話があると、妙に謙^{へりくだ}ったり、逆に威張り散らしたりする人が多い。一番多いのは、

「何でウチになんか来るんですか!？」

と怒り出すタイプの人だ。こういう人が、一番困る。

水無月さんは、そのいずれのタイプでもない。ますます会いたくなかった。

僕は一体何をしに行くつもりなのか？ ふと冷静になって考えた。しかし、納税額から考えて、何か出て来そうな予感がする。探偵事務所を軽く見るつもりはないが、二年連続で納税額が一千万円を超えているのは尋常ではない。行ってみる価値がある。本気でそう思った。

そして数日後、僕は水無月探偵事務所があるグランドビルワンの前にいた。

「ここの五階か……」

緊張して来た。探偵事務所というからには、それなりに人をたくさん見て来ているはずだ。もしかすると、一筋縄では行かないかも知れない。思わずゴクリと唾を呑み込んだ。

一階のロビーからエレベーターホールへと向かう。どうしてかわ

からないが、このビルのテナントは五階の水無月探偵事務所のみのようだ。立地条件は悪くないのに、この空室の多さは気にかかった。家賃はいくらくらいなのだろう？　水無月さんの家賃は、月五十万円だった。

いろいろと気になってしまい、五階までいくのに随分手間取ってしまった。エレベーターホールから探偵事務所の入っている部屋までは、外廊下で繋がっている。正面の大通りは、この辺でも指折りの交通渋滞を引き起こす地点だ。僕も納税者のところに行く時は、場合に寄っては署の車を使う事があるが、なるべく通らないようにしている道だ。もうすぐ九時半になろうとしている時刻だが、まだ渋滞は収まっていない。

「……」

そして遂にドアの前に来た。ドアフォンに手を伸ばした時だ。

「お待ちしておりました」

いきなりドアが開き、僕の前に女性が現れた。黒髪ストレートのロングヘア。黒目の多い大きな瞳。高過ぎず、低過ぎずの鼻。薄くて小さめの唇。アイボリーホワイトのスーツを着た、美人だ。この人があの電話の女性だろうか？

「あ、あの……」

あまりのタイミングの良さに、僕は言葉が出なかった。その女性はニコツとして、

「税務署の方ですね？　お時間、正確ですね」

「は、はあ」

僕はようやく落ち着きを取り戻し、上着の内ポケットから身分証を取り出した。

「H税務署個人課税部門の尼寺務です」

「水無月探偵事務所の所長で、水無月葵です」

この人だ。この人が水無月葵さん。想像していたより、ずっと綺麗だ。そして、凄くいい匂いがする。

「どうぞ」

そう促されなかったら、僕はずっとそこで妄想に耽っていたかも知れない。

「どうぞおかけになって下さい」

中に入った。机が三つコの字に並べられていて、真ん中が水無月さんの席だ。「所長」というプレートが立てられている。奥の席にもう一人、女性が座っていた。手前の席は誰も使っていないようだ。「いらつしやいませ」

その人も綺麗な人だ。水無月所長はキビキビした印象だが、その女性は穏やかな雰囲気である。机の上のコンピュータで何かを入力している。後で確認させてもらおう。僕はその女性に会釈して、机の手前に配置されている黒い革張りのソファに腰を下ろした。

通常、税務署の調査は、初日の午前中は、経営者の身上調査をする。いきなり帳簿類を見たりはしない。対象者の人となりを見て、どんなところに注意して調査をすべきかを判断するために話をするのだ。何気ない一言から、とんでもない秘密が発覚する事もある。「どうぞ」

辺りをキョロキョロ見ていると、もう一人の女性がコピーを出してくれた。素早い人だ。さっきまでコンピュータを操作していたはずなのに。

「失礼しました。私の部下の神無月美咲かなづき みさきです。主に調査業務を担当しています」

水無月さんが紹介してくれた。

「宜しく願います」

神無月さんは笑顔で挨拶した。この人も素敵な人だ。でも僕は断然水無月さんだな。

コホン。何を考えてるんだ。今は仕事だぞ。

向かいのソファに水無月さんが座った。ドキンとしてしまう。やっぱり綺麗な人だ。

「では、所長さんの身上調査をさせていただきます」

「はい。何でもお尋ね下さい」

主な内容としては、家族構成、未婚既婚の別、事業を始めるに当たつての経緯など、一見他愛もないような事を尋ねながら、相手の目の動きや、仕草を注意深く観察する。不審な点はその都度問い質す。その点がうまくいけば、調査は成功したも同然なのだ。それくらい比重が大きなものである。

しかし、僕は完全に水無月さんに飲まれてしまっていた。肝心な事は何も聞き出せていない。水無月さんは何も拒否してないし、嘘もついていないようなのだが、僕はどんどん見当外れの事を聞かされていた。何故なのか、後で考えてもよくわからない。

「午前中はこの辺で。午後は帳簿類の方を見させて頂きますので」
僕はそう言いながら立ち上がった。

「あら、どうなさいましたの？」

水無月さんは不思議そうな目で僕を見上げた。

「あ、その、昼食をとつて来ます。一時には戻りますので」

「まア、昼食ならもう頼んでありますのよ。こちらでお召し上がり下さい」

「えっ？」

原則として、調査に行つた先で食事を頂くのは、極力避けなければならぬ。調査対象が食堂やレストランの場合は仕方ないのだが、それでも代金は支払うのだ。そうしないと、公平公正な調査を実行できないからである。

「あ、あの、困ります。食事は外でとりますので」

僕がそう言つても、水無月さんは、

「そういう事は、いらつしやる前に教えて下さらないと。頼んだものが無駄になりますから、こちらで食事して下さい」

「は、はア……」

出されたのは、高級割烹の豪華な弁当だった。こんなの、代金いくらするんだ？ 自腹で出すの、辛いなア。

「い、頂きます」

「どうぞ」

水無月さんも同じものを食べるようだ。僕は彼女と差し向かいで食事する緊張と、高級弁当の代金が気になるのとで、全く料理を味わう余裕がなかった。

「あれ？」

ふと目を上げると、いつの間にか水無月さんは食事を終えていて、神無月さんと仕事の話をしている。そんなに時間が経ったのか、と思つて腕時計を見たが、まだ十二時五分だ。こういう事なのだろうか？ 水無月さんは弁当を食べなかったのか？ お膳は片づけられているから確認はできないが、それにしても何かこの事務所、普通ではない感じがする。

「あ、あの」

僕は食事を終わると、水無月さんに声をかけた。

「あ、おすみでしたのね。美咲、お茶を差し上げて」

「はい」

神無月さんが給湯室の方へと歩いて行く。僕はそれを見てから、
「あの、これいくらですか？ お金を支払わないといけませんので」
「そんな、いいですよ。税務署の方からお代を頂くんてできませんから」

水無月さんはニツコリしてそう言つてくれた。個人的にはそれはとても嬉しい言葉だったが、公務員としては決して受け入れてはいけない言葉なのだ。

「そういう訳にはいきません。規則ですから。お支払い致しますので。おいくらですか？」

「そうですか」

水無月さんは給湯室から戻つて来た神無月さんに、

「ねえ、あのお弁当、いくらしたの？」

と尋ねた。小声だったが、聞こえてしまった。

「一万円です」

「うわ……。やっぱり……。そのくらいしそうだと思った。弱ったな、そんなにお金持つてないぞ。どうしよう？ 払いますって言っ

た手前、困った事になったぞ。

「あ」

そんな事を考えていると、水無月さんが僕の前に座った。

「お弁当の代金なんですけど」

「は、はい」

聞こえていた事を悟られないようにしなくては。僕は表情に気をつけた。

「五百円です」

「はッ？」

僕は耳を疑った。どういう事だ？ でも、水無月さんがそう言うのなら、そう思っしかない。まさか、

「一万円と言ってましたよね」

とは言えない。いや、正直言いたくない。そんな心境だった。

「え、でも、そんな安くないですよね？」

僕はそれでも良心が咎めて、そう言わずにはいらなかった。すると水無月さんは微笑んで、

「このお弁当は当事務所で尼寺さんに販売したのです。ですから、五百円ですよ」

「はあ。しかしですね……」

僕はそれでは申し訳ないと思った。

「何でしたら、領収証を切りましょうか？」

「……」

僕は彼女の笑顔に負けてしまった。

「はい」

財布の小銭入れから五百円玉を取り出し、

「ご馳走様でした」

「ありがとうございます」

その時、僕の指先が彼女の手の平に触れた。冷たい。冷たかったが、僕は火傷したと思うくらい、身体が火照った。思わず顔を下に向ける。

「どうされたんですか、お顔が赤いですよ？」

水無月さんが僕の顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫です」

神無月さんが出してくれたお茶を飲み、僕はつい溜息を吐いてしまった。

「ふう」

また水無月さんが僕の顔を覗き込む。

「お疲れなんですか？」

「あ、いえ、そんな事は……」

と答えながらも、実はヘトヘトになっていた。この女のせい^{ひと}で……。そして僕は、水無月さんにいろいろ訊かれ、話す必要がないような事まで言ってしまう、最後は彼女と別れた事まで喋ってしまった。

「あら、もうこんな時間」

水無月さんのその声に僕は我に返って腕時計を見た。わああ、三時だ！ 何て事だ！

「す、すみません、ずっと話し込んでしまっ……」

「いえいえ。何をお出しすれば宜しいですか？」

水無月さんは楽しそうに尋ねた。完全に遊ばれている気がして来た。

「出納帳と、証憑書類と、請求書、領収書を。それと、今日現在の現金残高を教えて下さい」

「わかりました」

それにしても、さつきから時間の感覚がおかしい。どうしたのだろう？

「え？」

僕は出納帳を見て驚いた。入金と出金の相手先、摘要は細かく記入されているのに、現金残高が全く書かれていないのだ。慌てて提出された申告書を広げてみる。決算書の貸借対照表の現金残高もゼロになっている。

「あの、今日現在の現金残高を教えてください」

僕は水無月さんを見て言った。彼女は楽しそうな顔で僕を見ていたが、

「現金はありません。ゼロです」

「……」

やられたか？ これはかなり手強い人だぞ。

現金残高がゼロという事は、事業所としての収支は全て水無月さん個人を通してしているという事。簡単に言ってしまうえば、入金と出金の詳細を辿り切れない可能性があるのだ。

「事業用の預金通帳はありますか？」

「ありません」

水無月さんはニコニコして話す。

「水無月さんの個人名義の通帳は？」

「それありません」

「……」

お手上げ寸前だ。どうしたらいいのだろうか？

「では、水無月さん個人の手持ち現金はどこにありますか？」

「こちらです」

水無月さんは立ち上がり、自分の机に向かった。僕も後についた。

「この中です」

彼女は一番下の引き出しを開け、中から小ぶりのハンドバッグを出した。

「どうぞ、お改め下さい」

「は、はい」

僕はバッグを受け取り、机の上で中身を確認した。

「！」

息を呑んだ。ザツと見ただけで、一千万円くらいある。これを毎日持ち歩いているのだろうか？

「数えてみて下さい」

水無月さんは、微笑んだままで僕を促した。僕は唾を飲み込んで、札束を机の上に出した。職業柄、札束を見たり数えたりするのは慣

れているが、この時ばかりは酷く緊張した。何かの罨か、と思っ
てしまったのだ。

しかし、それは僕の思い過ごしで、何もなかった。札束は、一
千二百万円あった。

「現金をこんなに持ち歩くのは非常に危険ですよ」

僕はいつもの指導事項を話した。

「できるだけ手持ち現金は少なくして、大きな支払は小切手が振込
みでなされた方が、効率もいいはずですよ」

「私共の仕事は、振込みや小切手が使えない相手が多いのです。で
すから、通帳も小切手帳も使わないのです」

つまり、裏社会という事か？ 情報屋とか、垂れ込み屋とかは、
現金がいいだろうからな。

「ですが、依頼人も振込みを希望される方がいるでしょう？」

「そういう方は、お断りしていますので」

「……」

研究されているのか？ それとも偶々（たまたま）なのか？ 全
部現金取引だとすると、もうこれ以上調べる事ができない。金融機
関に裏を取る事も無理だ。但し、彼女が嘘を吐いていて、本当は預
金がある可能性も考えられる。それは明日当たってみよう。

「時間になりましたので、今日はこれで帰ります。明日は、請求書
関係を見させていただきますので」

僕はグツタリして立ち上がった。

「わかりました」

水無月さんも立ち上がった。その時、僕は神無月さんのパソコン
に気づいた。

「それはインターネットもできるのですか？」

「はい」

神無月さんも笑顔で答える。

「ではその料金の支払はどうしていますか？ 普通クレジットか、
通帳から引き落としですよ？」

やった。尻尾を掴んだ。そう思った。しかし、ダメだった。神無月さんが言った。

「ああ、これは無料です。プロバイダーがクライアントさんなんです。調査費と相殺で、十年間無料です」

契約書を確認したが、その通りだった。完全敗北か？　しかし、諦めてなるものか！

「わかりました。ではまた明日参ります」

僕は水無月探偵事務所を出た。

そして翌日。僕は再び水無月探偵事務所を訪れた。

請求書と領収書、そして顧客との契約書を全部調べたが、何も見つけられなかった。

こちらはまさに「水も漏らさぬ」という表現がピッタリの状態だった。さすが探偵事務所、というところか。

出向く前に水無月さんの個人資産を調べたが、定期預金はおろか、普通預金すらない。他人名義でしていれば探すのが難しいが、それはないだろう。あの人はそんな小細工はしない。多分、本当に預金はないのだ。そんな気がする。

ただ、念のため法務局で調べたら、あのグランドビルワンは彼女が所有する土地に不動産会社がビルを建て、彼女が借りている形になっていた。何故そんな事をするのか理解できないが、何も不審な点はない。

一つだけ、気になる事がある。それは彼女自身だ。恋人はいるのだろうか？　いるだろうな。あれだけの容姿で、事業家でもあり、相当な人脈もあるようだから。僕なんか、相手にもしてくれないだろう。

「尼寺さん」

帰りがけに水無月さんが声をかけた。

「はい」

僕は何だろうと思って振り向いた。

「今度は、個人的にお会いしません？」

彼女は誘うような目で僕を見ている。危うくその気になりそうだったが、何とか公務員としての節度を守れた。

「それは致しかねます。僕が、貴女の住所地の管轄でない税務署に移動になったら大丈夫です」

「まあ、結構言いますのね、尼寺さんも」

その時の彼女の笑顔は、多分一生忘れられないくらい素敵だった。

そして、現在。

僕は再び水無月探偵事務所に行こうとしている。リベンジ。そう言えば聞こえがいい。確かにその思いもある。しかしそれ以上に、僕は彼女の笑顔を見たくて仕方がなかったのだ。

「調査官失格だな」

そう呟き、僕はエレベーターに乗った。

その日は茹だるような暑さだった。

調査ファイル2 藤村蘭子の場合

僕はH税務署の職員、あまひらつむ尼寺務。昨年までは個人課税部門に所属していたが、今年度からは法人課税部門に異動した。そして、世間一般ではあまり好かれる仕事ではない「税務調査」を主な仕事としている。先日調査に行ったところは、経営者が強かしたたで、肝心なところでも見つけられずに終わった。

今回僕が調査対象に選んだのは、ここ何年かで、この不景気にも関わらず、グングンと業績を伸ばしている建築板金業だ。特別何か不審な点があるとは思わなかったのだが、社長の役員報酬が月額にして七十万円で、奥さんの役員報酬も、月額換算で四十万円。少々過大役員報酬の臭いもしたので、起業から五年目というのもあり、数ある法人の中から選んでみた。

そして調査日当日。僕は申告書の束を鞆に詰め込み、署を出た。あまり「申告是認」ばかりが続くと、僕的能力が問われる事になる。そろそろ正念場だった。

申告是認とは、調査に入ったが、何も間違いや不正がなかったという事だ。本当はそれに越した事はないのだが、それは建前で、本音は「何も出ないのは調査官の実力の問題」と評価される。だから僕は焦っていたのかも知れない。

調査対象の法人に到着した。自宅の敷地の一角に別棟で事務所を建て、光熱費等もしっかり分けてあるようだ。小規模法人の多くは、個人の支出と法人としての支出を明確に線引きできていないところが多い。端的に言うところ「財布を分けられていない」のだ。税務調査では、その辺についていくのが基本である。特に建築板金などの場合、自宅の板金を行って、売上に計上しない事がある。これは法人税法ばかりでなく、消費税法にも抵触する問題なのだが、大抵の小

規模法人はその辺がおろそかだ。今日はそこを念入りに調べようと思っていた。

社長の自宅の屋根や樋を見ると比較的新しいので、最近工事した可能性がある。これはいけるかも知れないと僕は内心思っていた。普段は自宅にいと聞いていたので、自宅のドアフォンを押す。すると奥さんが顔を出し、続いて顧問税理士事務所の担当の人が顔を出した。

(あ……)

何とその子は、高校の同級生だった。しかも、僕が片思いしていた藤村蘭子さんだ。事務所の制服なのだろうか、紺のスーツが眩しい。スカートの下は「生足」で、白の靴下だ。思わず唾を飲み込みそうになる。

「ああ、やっぱり尼寺君ね。珍しい苗字だから、そうじゃないかと思っただ」

「あら、藤村さんのお知り合い？」

奥さんが驚いた顔で言う。するとその後ろから社長が現れ、

「なら安心だな。今日は何も出ないだろ？」

などと、冗談とも本気とも取れる事を言った。僕は眩暈めまいがしそうだった。

奥さんは藤村さんに僕の事を根掘り葉掘りと聞きまくり、いつまで経っても事務所に移動しようとしないう。そこで、僕は思い切って切り出した。

「あの、そろそろ調査を開始したいのですが……」

「ああ、ごめんなさいね、私一人で盛り上がったって」

奥さんは大声で笑いながら、サンダルを履くと、向かいにある事務所に歩き出した。僕はそれに続いた。藤村さんと社長が後ろから話しながら来る。

「税務署に同級生がいるのだから、もう大丈夫だね、藤村さん」

「それは関係ないですよ、社長」

藤村さんが困り顔で答え、僕を見た。僕は社長を見て、

「税務署も税理士事務所も、馴れ合いの組織ではありませんので、ご承知置き下さい」

すると社長はニヤニヤして、

「わかつてるよ、山寺さん」

「尼寺です」

社長はそんな僕の肩をポンと叩き、先に事務所に入って行った。

「尼寺君」

藤村さんが小声で話しかけて来た。何だろう？

「今日さ、仕事終わってから会えない？」

「え？」

僕はドキツとした。好きだった人からの誘い。いや、そんな風に考えてはダメだ。

「話があるの」

藤村さんはニコツとして付け加えた。

「取り敢えず、仕事ね」

彼女は僕を追い越し、事務所に入って行った。

調査はまず社長個人の身上調査から入る。家族構成、起業の経緯などだ。でも、その大半を答えたのは、藤村さんだった。彼女はこの法人を担当して三年目で、家族構成から子供の進学先まで、あらゆる事を把握していた。年の暮れから始まる年末調整も引き受けているので、扶養控除等申告書で知ったのだらう。一般の会社員の人には、あの書類すら頭痛の種で、毎年経理担当の人にせっつかれている人も多いと聞く。

いけない。藤村さんに圧倒されている。僕は何とか主導権を握ろうといういろいろ尋ねてみたが、悉く藤村さんに「ブロック」された。

「では、午前中はこの辺で。午後は帳簿類を見させて頂きます」

僕はそう告げて、席を立った。

「尼寺君」

藤村さんが僕を追いかけて来た。

「何？」

「一緒に食事しない？」

「え？」

またドキツとする。断る理由はない、と言いたいところだが、担当税理士事務所の職員と二人きりでの食事はまずい。こちらも相手方も複数人なら問題はないのだが。

「大丈夫よ、税務署に言ったりしないから」

「いや、別にそんな事は……」

僕はそれを心配しているのではない。もう昔の事とは言え、かつて好きだった人と食事するのは緊張するのだ。

結局僕は藤村さんに押し切られ、近くのアミレスと一緒に食事する事になった。

「でも驚いた、尼寺君が税務署に勤めてるなんて。全然同窓会とか来ないから、どうしているのか知らなかったし」

「ああ」

僕は高校の同窓会は出たくない。当時苛められていたのだ。苛めていた奴の中に、藤村さんを好きな奴がいた。藤村さんもそいつの事が好きだったのだ。だから余計出る気になれなかった。

「あ、ごめんね、私ばかり喋っちゃって……。何か、懐かしくてさ」

藤村さんの笑顔は素敵だった。あの頃と少しも変わっていない。

「いや、僕、話すの得意じゃないし……」

「フーン。変わってないね、尼寺君は」

「そうかな」

彼女は昔話に花を咲かせていたが、どれも僕にとっては辛い思い出で、只愛想笑いをして聞いているだけで精一杯だった。

やがて昼休みの時間は終わりに近づき、僕達は席を立った。支払を済ませようとすると、

「ここは私が出すわ」

と藤村さんが伝票を僕の手から取り、レジに行ってしまった。そし

て後から僕の分を渡そうとすると、

「今日は尼寺君に会えた記念に、私が奢^{おし}るわ。またいつか奢^{おし}って」

「いや、でもさ……」

僕は慌てた。それはまずいからだ。

「大丈夫よ。二人だけの秘密にしておけば。ね？」

藤村さんの強引さとその「ね？」の後の笑顔に負け、僕は承諾した。

そして調査午後の部が始まる。出納帳、請求書、納品書、契約書とあらゆる書類が用意された。僕はそれを一つ一つ慎重に調べた。

「たな卸しの原簿がありますか？」

たな卸しの原簿とは、仕入れて使わずに残った材料などを決算期末に数えた時の書類だ。一般的に「正」の字を書いて数えたものを指す。清書した物ではなく、あくまでその場で使った物をみせてもらうのが鉄則だ。

「はいよ」

社長が机の引き出しから取り出し、藤村さんに渡した。藤村さんはそれをパラパラと見てから、

「はい」

と僕に差し出した。

「ありがとうございます」

僕がそう言っていると、奥さんが、

「山寺さん、お堅いのねえ。藤村さんとはお友達なんでしょ？ そんな畏^{かしこ}まらなくてもいいのに」

「あの、尼寺です」

「あら、ごめんなさい」

奥さんはゲラゲラ笑った。社長もこの人も悪い人ではないのだから、あまりにも無神経過ぎる。

「奥さん、例え親友でも、仕事とプライベートは区分けするのが、真の公務員なんですよ」

藤村さんが助け舟を出してくれた。

「藤村さんも彼氏いないそうだから、付き合っちゃえば？」

唐突に奥さんが切り出す。え？ 藤村さん、あいつと別れたの？ それより、何故僕は彼女がいない事を前提にされているのだろう？

「奥さん、そういう話はやめて下さい」

藤村さんは微笑んでいたが、迷惑なのだろう。僕は、

「話を戻していいですか？」

と奥さんの脱線を修正した。

「は、はい」

奥さんはさすがにまずいと思ったのか、居ずまいを正して僕を見た。

「申告書には、仕掛品のたな卸しも書かれていました。そちらの元になる書類はありますか？」

仕掛品とは、未完成の工事にかかった原価と、それに付随する諸費用をたな卸しと同じく、集計した物だ。完成前はたな卸し資産と同様のあつかいとなり、原価から差し引く処理をする。所謂期末在庫と同じだ。

「出面帳でうめんちやうがあります。材料や外注は、現場毎に請求明細があります。藤村さんがすかさず答えた。出面帳とは、現場で働いた作業員の出勤簿の事で、これは給料の計算に使われる。

「ではそれを見せて下さい」

社長が机から取り出し、藤村さんに渡す。藤村さんがそれをチラッと見て、僕に差し出す。

「……」

細かい。社長の身上調査でも感じたが、この社長、見た目は豪胆な人だが、商売に関してはかなり神経を使うし、計算高い考えを持っている人のようなのだ。

「原価計算表もあります。ご覧になりますか？」

奥さんに変な事を言われたせいか、藤村さんはすっかり口調が変わった。

「はい」

僕も愛想笑いをせずに答える。

調査は淡々と進んだ。どの帳簿も完璧に近く、付け入る隙はなかった。

（また申告是認か……）

僕は憂鬱になった。

「時間ですか？」

上の空の顔をしていた僕に、藤村さんが声をかけた。

「あ、はい。また明日参ります」

挨拶をすませ、早々に事務所を出た。今度は藤村さんは声をかけて来なかった。

重い足取りで署に帰った。明日、何か出て来る可能性は薄い。どうしたものか？先輩に話して、同行してもらおうか？それとも上司の統括官に？それも気が滅入る。自分の無能さを曝け出すようなものだ。

あれこれ考え、報告をすませ、僕は署を出た。

「え？」

門の脇に、藤村さんが立っていた。

「お疲れ、尼寺君」

「あ、お疲れ様」

僕は顔を引きつらせたように作り笑いをした。

「行きましょうか」

「え？」

藤村さんはそう言うのと歩き出した。僕は何も返事をできないまま、彼女を追った。

「ここでもいい？」

藤村さんは、近くの喫茶店の前で立ち止まった。

「うん」

拒否する理由はない。僕は藤村さんに続いて、中に入った。藤村さんは奥のボックス席に行き、壁を背にして座った。僕はその向かいに座る。

「ごめんね、強引で」

「え、いや、別に」

強引でも藤村さんと話せるなら構わない。すっかり仕事モードをオフにした僕はそう思った。ウエイトレスが来てオーダーを取る。

藤村さんは紅茶、僕はコーヒーを頼んだ。

「尼寺君、頑張ってるわね。私、今日、ドキドキしてたの。いろいろ指摘されたらどうしようって」

「そ、そうなんだ」

例え嘘でも、そんな事を言われると嬉しいものだ。

「それでね」

藤村さんが切り出す。その時、ウエイトレスが紅茶とコーヒーを持って来た。藤村さんはウエイトレスが立ち去るのを待って、

「実は尼寺君にお願いがあるの」

「え？」

何だ、お願いって？ 僕は心臓の鼓動が彼女に聞こえてしまうのではないかと心配になった。

「今日調査に入った会社は、これからのの。私、三年かけて、社長と奥さんの考え方を軌道修正してきたの。もう一息なの」

「え？」

何が言いたいのだろう？ 藤村さんの顔は、真剣そのものだ。

「あと少しで、あの会社は完全に全うな会社になるわ」

「そう」

僕は思わず冷たい返事をした。しかし藤村さんは気にせず、
「だから、明日仮に何か見つかったも、目を瞑って欲しいの」

「！」

そついう事か。何かと思えば……。目^{めい}溢^はししろという事か。

「お願い、尼寺君、私を助けて」

藤村さんはまさしく懇願するような目で僕を見ている。

「今、調査で何か指摘されてしまうと、あの二人はまた元に戻ってしまうわ。将来的には、あの会社はもつと伸びる。だから、今は待つて欲しいの。必ず、優良法人にしてみせるから」

藤村さんは本気だ。本気で僕を説得しようとしている。でも僕の答えは決まっていた。

「無理だよ、藤村さん。そんな話には応じられない」

「そう」

藤村さんの顔つきが変わった。

「わかった。もう頼まない。また明日、会いましょう」

彼女はサツと伝票を持ち、レジに歩いて行った。僕はすぐに追いかけて、その手から伝票を取り、

「ここは僕が払うよ」

と言った。

次の日、藤村さんは喫茶店の事を忘れたかのように普通に接して来た。僕も何事もなかったかのように応じた。

結局、何も見つけれなかった。帰りがけに見た藤村さんの顔は忘れられないだろう。明らかに僕を見下していたのだ。でも、彼女にどう思われようと構わない。僕は僕の信念で動いたのだから。

「く……」

しかし、署に戻り、トイレの個室に籠もると、泣いてしまった。何が悲しいのか、悔しいのか、考える事もできないほど、涙が止まらなかった。

でも僕は続ける。辞めろと言われるまで、この仕事を続けたい。誇りを持ってできる仕事だから。

調査ファイル3 藤村蘭子の場合その2

僕は尼寺務。^{あまぐしとむ} 税務署の職員。法人課税部門で、主に会社の税務調査をしている。しかし、まだまだ修行が足らず、税理士事務所や訪問先の法人にあしらわれている。そんな訳で、辛い日々が続いている。

トラウマになりそうなくらい酷い目に遭った事を引き摺っていた僕は、「近藤力税理士事務所」^{こんどいちから}が担当している法人の調査を回避していた。そこは、僕の高校の時の同級生である藤村蘭子さんがいるからだ。彼女は優秀な税理士事務所の職員で、他の調査官も彼女の担当している法人では、ほとんど申告是認を余儀なくされていた。僕もその中の一人だ。

申告是認とは、調査をしたが、何も誤りも不正もなかったという事である。言い方を変えれば、「税務署の敗北」とも言えるかも知れない。納税者側から見れば、それに越した事はないのだが、もしそれが調査をした職員の力量のせいで発覚しなかったただけだとすれば、やはり問題なのだ。大局的に見れば、真面目に納税している他の納税者や法人が割を食っているという事にもなるからだ。

そんなある日、僕はある法人の調査に行く事になった。法人の事業は飲食業。最近メキメキと売上げを伸ばし、店舗を改装して事業を拡大しているラーメン店だ。社長はまだ三十代の若さで、従業員は五人。しかし、前年度の売上高は、税抜きで五千万円を超えている。一店舗としては結構大きな売上げだ。

何かある、と思った訳ではない。飲食業の場合、よくあるのは、社長や奥さんの自家消費分の計上漏れだ。要するに、自分達が食べたラーメンやその他の料理の売上げを計上していないケースだ。お金のやり取りをしていないと、ついつい忘れてしまう事だが、これ

も売上げに計上するのが正しい税務処理なのだ。そこを調べて行けば、連敗記録も止められるのではないかと思った。もちろん、自分の成績ばかりを念頭に置いて調査をするつもりはなかったが。

「顧問税理士は実相寺沙織さんか。聞いた事ないな。新しく税理士になった人だろうか？」

僕はその税理士の先生を調べてみた。まだ若い女性だ。昨年開業したばかりらしい。それなのに関与先が数十軒あるようだ。どうやら、親御さんが税理士で、暖簾分けという形で関与先を引き継いだらしい。僕はその先をもう少し調べれば良かったのだ。今となっては後の祭りなのだが。

そして調査当日。僕はそのラーメン店を訪問した。定休日に来て欲しいという社長の願いを聞いたので、店は閉まっており、従業員は誰も来ていない。裏口から入るように言われていたので、店の横の狭い路地を進んだ。

「H税務署法人課税部門の尼寺と言います」

僕はドアを開いて顔を出した女性に身分証を提示した。どうやら奥さんらしい。ラーメン店の人らしく、愛想がいい。

「お待ちしました。どうぞ」

僕は店内に足を踏み入れた。そこは厨房だった。店は休みだが、仕込みは休みではないらしく、社長らしき人が大きな鍋の前で何回もスープの味見をしていた。

「あんだ、税務署の方が見えたわよ」

奥さんが声をかける。すると社長は振り返り、
「もっと大きな会社を調べりゃいいだろう？ 何でウチみたいな小さいところを虐めるんだよ！」

といきなり喧嘩腰で怒鳴って来た。このパターンは慣れて来たが、それでもいい気持ちはしない。

「社長、そういう事は言わない方がいいですよ」

えっ？ 今の女性の声は？ 嫌な汗が出る。嫌な事を思い出す。

「尼寺君、久しぶりね。まだ調査官しているの？」

皮肉タツプリの事を言いながら、厨房に現れたのは、封印したい記憶の元凶である藤村蘭子さんだった。

「あ、あ、ど、ど……」

呂律が回らない。藤村さんはクスツと笑って、

「どうして私がいるのかって訊きたいのね？」

「あ、ああ……」

まだ口が回らない。藤村さんは腕組みをして、

「近藤先生のお嬢さんが税理士になられたのよ。それで、一時的に応援という形で、私がサポートしているの」

「……」

悪夢だ。避けたつもりが、思い切り命中してしまった。

「何だ、藤村さんの知り合い？　じゃあ、大丈夫だね」

社長は手の平を返したようににこやかな顔で僕を見た。今の言葉、まるでデジャヴだ。

「私の知り合いだという事は関係ありませんよ、社長」

藤村さんはニコツとして社長を見た。それからまた僕を見て、

「でも、何もでないのは確かでしょうね」

「……」

侮辱とも取れる言葉だが、何も言い返せない。最初から圧倒されてしまっている。またダメなのか？　そんな感覚が頭の中を占めて行く。

甦りそうな悪夢を振り切り、僕は調査を開始した。

厨房では手狭なので、店のテーブルを一つ借りて場所を作り、社長、奥さん、藤村さんは、一つ隣のテーブルに陣取った。周囲を見回すと、芸能人のサインやら、表彰状やらが並んでいる。神棚には客商売には欠かせない招き猫があった。

「では、社長さんにお尋ねしますね」

僕がそう切り出すと、社長はニヤツとして、

「まあ、形式だけなんでしょ？　もう調査は終わったようなもので

すよね、山寺さん」

「尼寺です」

どうしてみんな、「山寺」と思うのだろう？ 確かに珍しい苗字かも知れないけど。

そして、社長の身上調査を開始する。家族構成、開業に至った経緯など。ここからいろいろ社長の人となりを見て行くのだが、第一印象が悪いので、何か隠しているように見えてしまう。さつきも、僕がサインや表彰状を眺めていた時、ソワソワしていたような気がするのだ。

何かある。そう思った。しかし、その何かがわからない。藤村さんは相変わらず冷静な目で僕を見ている。

「何でも訊いてもらなさい。全部私が答えてあげるから」

そんな風に見えた。考え過ぎだろうか？

今回の調査は、一日だけだ。開店している日には、社長も奥さんも立ち会えないというのだ。だから僕は、身上調査を早めに切り上げ、帳簿類を見せてもらった。奥さんは簿記ができるらしく、出納帳は完璧に近い。数字を間違った時にする「見え消し」もしてある。「見え消し」とは、訂正した数字がわかるように赤のボールペンで二本線を引き、その上に正しい数字を書き入れる方法だ。そのために、あらかじめ書き込む数字を行の三分の二くらいに押さえておくそれもきつちりやってある。奥さんの性格もあるのだろうか、この辺も藤村さんの指導が行き届いているのだろう。

帳簿類は隙がない。奥さんと藤村さんの見事な連係プレーで、僕は何も見つけられなかった。と言うより、実際何もないのだろう。

また失敗したか？ また嫌な汗が出る。

「お昼はどうする、尼寺君？」

藤村さんが尋ねて来た。

「え？」

あの時の記憶が……。

「山寺さんも煮え切らない男ねえ。藤村さんが誘ってるのに、ぼん

やりしちやってさあ」

奥さんが突拍子もない勘違い発言をした。僕はビクリして奥さんを見た。苗字を間違われた事を指摘できないくらい動揺している。「そうよ、尼寺君。私に恥を掻かせないで」

藤村さんまで悪乗りして来る。まずい、ますます飲まれて行く…

…。

「さ、行きましょうか」

藤村さんは僕を強引に外に連れ出した。

「どこで食事する？」

彼女はまるでデートにでも出かけたかのように嬉しそうに言う。そして、

「あ、いけない、携帯忘れた。ちょっと待っててね」

とウインクまでして、戻った。僕は藤村さんに遊ばれている。そう思った。

今回は、別に昔話もせず、妙なお願いもされず、ごく普通に会話をした。

「税務署には、若い女の子もいるんでしょ？　どうなのよ、尼寺君」
「相手にしてもらえないよ」

「フーン、そうなんだ」

藤村さんの笑顔はどこか怖い。何だろう？　ふとそう思った。

「じゃ、私が立候補しちゃおうかな、尼寺君の彼女に」

「！」

僕はギョツとして彼女を見た。藤村さんはからかう様子もなく、僕を真っ直ぐ見ている。

「何、私じゃ不満そうね？」

「いや、そんな事は……」

藤村さんはこれほど乗りが軽い子ではなかった。性格が変わったのだろうか？　それとも男と別れて、自棄^{やけ}になっているのか？

「じゃ、考えといって。私、待ってるから」

藤村さんはニコツとして立ち上がった。

「戻ろうか」

「う、うん」

どういう事だろう？ 本当に僕に気があるのか？ いやそんなはずはない。うーん、わからない、彼女の考えが。

店に戻ると、

「どうだった？」

と奥さんが興味津々の顔で訊いて来た。藤村さんはニコリして、
「振られちゃいました」

「まあ！」

こいつ、何て自惚れた奴だ、という目で、奥さんが僕を睨む。
「ち、違いますよ」

僕は慌てて否定したが、奥さんは取り合わない。

「こんな男、やめといった方がいいよ、藤村さん」

「そうですね」

藤村さんは笑顔で応じた。ああ。僕は完全に悪役だ。

「山寺さん、女の子にはもうちょっと優しくした方がモテるぞ」
社長が小声でアドバイスしてくれた。

「はあ……」

苦笑いするしかなかった。

僕は気を取り直して椅子に座り、帳簿に目を向けた。

（あれ？）

店全体に何か違和感を覚えた。何だろう？

（気のせいかな）

僕は再び帳簿を見た。予想していた自家消費は、月末毎に社長と奥さんの分がしっかり現金で徴収されていた。ダメだ。藤村さんにそんな手抜きはない。僕は絶望的になった。

「従業員さんの賄い^{まかな}はどうなっていますか？」

「給料に加算してあります。もちろん、その分は売上に計上してあ

りますよ」

藤村さんは勝ち誇ったように答えた。だよな。そんな事で見つかるほど、藤村さんは甘くない。

（もしかして、またやってしまったのかな？）

何もない法人を調査した？ そんな気がして来る。でも、あの午前中に見た社長のソワソワは何だったのだろうか？ もう一度僕が店内を見回しても、社長は慌てていない。

（さっきの違和感は？）

そうだ。店に戻った時のあの感覚。僕は靈感なんてないと思うが、何かがおかしいと思ったのは事実だ。

「！」

わかった。招き猫だ。神棚にあつた招き猫がなくなっている。藤村さんをチラツと見ると、僕が何かに気づいたのを察知したらしく、ソワソワしている。

「招き猫がなくなっていますね」

僕が誰にともなく言うつと、奥さんがガタンと立ち上がった。

「奥さん、招き猫はどこにありますか？」

奥さんの顔色が見る見るうちに悪くなる。社長も落ち着きなく貧乏揺すりをし出した。藤村さんは僕を見ようとしなない。

「招き猫なんてありませんよ。何言ってるんですか、山寺さん」

奥さんは見え透いた嘘を吐いた。藤村さんがハツとして奥さんを見る。なるほど、そういう事か。

藤村さんが僕を食事に誘った理由^{わけ}。僕を店から連れ出し、招き猫を隠させるため。その指示を出すために、「携帯忘れた」と嘘を吐いて店に戻ったのだ。そして、僕の集中力と観察力をそぐために「彼女に立候補」などと動揺を誘う事を言った。

酷い。そこまでするか、普通？ まあいい。これで同情も何もいらなくなった。

「そうですか。僕の見間違いだっただんですかね？」

僕は椅子を持ち、神棚に近づいた。社長が慌てて立ち塞がる。

「ダメです、社長！ 妨害行為になりますよ」

藤村さんが叫ぶ。社長はギクツとして僕に道を開けた。僕は椅子の上に立ち、神棚を見た。

「招き猫の大きさに、埃が着いていないところがあります。ついさっきどけられたようです。何があったか、教えて下さい」

「そ、それは……」

社長と奥さんはすっかり動揺してしまい、藤村さんを見た。

「招き猫がありました。ごらんになりますか？」

藤村さんは観念したのか、そう言った。

「はい。是非」

僕は椅子から降りて答えた。

結局、招き猫の中から五百円硬貨が二十万円分出て来た。従業員の給料明細は二重に作られていて、額が操作されていたのだ。一日千円徴収していたが、税理士事務所には五百円徴収した形の明細を見せていた。

この場合、売上と給料で利益は相殺されるので、法人税は発生しないが、消費税は計上漏れとなる。この店は、簡易課税制度を選択しているからだ。簡易課税制度とは、一定規模以下の中小事業者が選択により、売り上げにかかる消費税額を基礎として、仕入れにかかる消費税額を簡易的に計算できる仕組みのことだ。一定規模とは、法人の場合は前々事業年度における課税売上高が五千万円以下であることを指し、なおかつ簡易課税制度選択届出書を事前に提出している免税事業者を除く事業者に適用される。要するに売上漏れは即消費税計上漏れとなる。但し、この店の場合、前年度の課税売上が五千万円を超えているので、来年度からは本則課税に移行する。

本則課税とは……。まあ、いいか。

給料の源泉所得税は、従業員に渡した方で計算していたため、彼らには迷惑がからずにすんだので、それだけは社長と奥さんはホツとしていた。しかし、この隠し方は悪質だ。延滞税だけでなく、

重加算税の対象になる。故意による過少申告だからだ。

「重加算税に関しては、上司と相談してお返事いたします」

僕は二人が修正に素直に応じたので、そこまで非情になるつもりはなかった。

型どおりの挨拶をすませて、僕は店を出た。

勝った？ いや、そんな感動はない。むしろ、何とも後味が悪い。何だろう？ あれほど調査で不正や誤りを見つけないと思っていたのに。

「あーあ」

ようやく辿り着いた山頂で、大して感動が味わえない登山者の心境だった。

「え？」

その時、携帯が鳴った。見た事がない携帯の番号だ？ 誰だろう？

「はい」

「尼寺君？」

藤村さんだった。何だろう？

「ありがとう」

「え？」

何故礼を言われるのかわからない。

「どういう事？」

僕は頭の中が疑問だらけになり、尋ねた。

「あの社長、ウチを舐めていたのよ。若い女の税理士だから。全く聞く耳持たないと言うか。困っていたの」

「そう」

僕は素っ気なく言った。

「以前は小銭なんて全部抜いていたらしいわ。でも、それだと現金の残高が不自然になるからと説得して、ようやく帳簿面だけはまともになったの。招き猫のお金も、さつき気づいたのよ」

「ふーん」

僕の言い方は意地悪だったかも知れない。

「ねえ、尼寺君、その言い方、私に対する仕返し？」

藤村さんが尋ねた。

「そう聞こえるのは、藤村さんに心当たりがあるからじゃないかな」
僕は更に意地悪な言い方をした。

「そうね。貴方にはもつと酷い事したかもね」

「そうさ。僕を動揺させようとして、あんな嘘を吐いて
そうだ。まだ足りないくらいだ。そう思った。

「酷い。尼寺君、あれ、嘘だと思っていたの？」

藤村さんの声が震える。え？ まさか……？

「いや、その、あの……」

僕は藤村さんが泣いてしまったと思い、慌てた。

「うつそー。その通りよ。貴方を動揺させようと思って嘘を吐いた
わ。ごめんなさい」

「……」

言葉がなかった。

「またどこかの会社で会いましょう。次は負けないわよ」

「ああ」

気のない返事をして携帯を切った。まだまだダメだ。今回は調査
は成功したが、藤村さんには負けた。そんな気がした。

でもバカな僕は、本当は藤村さんは泣いていたのかも知れない、
などと懲りずに妄想してしまった。

調査ファイル4 ある法人調査の場合

僕は尼寺務。H税務署法人課税部門勤務の、新人税務調査官だ。仕事がどうもうまくいっていない。法人の調査に行くが、何も見つけない事の方が多い。

高校時代の同級生で、片思いの相手でもある藤村蘭子さんが、ある税理士事務所にいて、彼女と調査で顔を合わせてからますます調子が悪くなった。藤村さんとのやり取りは僕にとってトラウマなのだ。

「はあ」

僕は自分の席で大きな溜息を吐いてしまった。

「どうした、尼寺？ 元気がないな」

上司である統括官が声をかけて来た。僕は作り笑いをして、「いえ、そんな事はないです、統括官」

と答えた。しかし、統括官はニヤリとして、

「いや、お前、顔に覇気がない。仕事に迷いがあるな？」

「え、いや、そんな事は……」

「最近、調査がうまくいっていないからか？」

統括官に隠し事は無理だ。素直に頷く。

「そうか。よし、次は私が同行しよう。調査はお前が進めろ」

「え？」

それはそれで拷問に近い。後ろで統括官が見ていると思うと、余計調査がうまく行かなくなる気がする。

そして結局、僕は統括官と一緒に法人の調査に出かけた。

「私も新人時代には苦労したものだ。しかし、それがやがて自分にとっての財産になる。今が踏ん張り時なんだぞ、尼寺」

「はい」

路地を歩きながら、統括官がアドバイスをしてくれた。

今日調査に入るのは八百屋だ。個人経営から起業し、株式会社になったところである。売上も消費税課税事業者になるほどで、調査対象の年度も消費税を支払っている。事業規模も比較的大きい方だ。「いいか、尼寺。この法人は、法人とは言っても、自宅と店舗が一つになっている。そういう形態で一番注意すべきは、家事関連費だ」

「はい」

家事関連費とは、家賃や電気代や電話代などの個人用と業務用が混在しているものの事だ。その区分けがしつかりできていない法人が多いので、調査の時、一番気を配るところなのだ。

「それも、ポイントを外してしまうと、何も見つけられない。そこをいかに見極められるかだ」

「はい」

やっぱり統括官の話はとても勉強になる。

やがて僕達は、対象法人の店の前に着いた。

予想通り、調査は散々だった。担当税理士本人が立ち会っていたため、あいまいな指摘をすると、

「それは法律の条文、あるいは国税庁の通達のどこに書かれていますか、尼寺さん？」

と指摘を受ける。その都度、僕はオタオタしてしまい、統括官に救いを求めてしまった。

家事関連費に関しても、事業と個人の割合は正当で付け入る隙がなく、建物は社長個人の所有で、きちんと賃貸契約を取り交わしており、家賃も法外に高いものではなく、標準的なものより若干低く設定されている。社長も家賃収入を不動産所得として、役員報酬と合わせて確定申告をしていた。完璧だ。

「はあ」

統括官が隣にいるのに、うつかり溜息を吐いてしまった。

「そうへこむな、尼寺。指摘事項は悪くはない。相手が上手だったんだよ」

統括官の慰めの言葉が身に沁みる。

「はい、今度こそ、頑張ります」

すると統括官は僕の前に立ち、

「その考え方はおかしいぞ、尼寺」

「は？」

急に厳しい表情になった統括官に、僕はギクツとした。

「税務調査とは、対象法人のミスをあげつらうものではない。正しい納税知識を知ってもらうためのものだ。その考え方では、いつまで経っても一人前になれんぞ」

統括官の言葉に、僕はハツとした。

調査法人の顧問税理士は敵ではない。同じ税務の仲間だ。調査対象の納税者は犯罪者ではない。国の財政を支えてくれる存在だ。それを忘れかけていた。何とか間違いやミスを見つけようとしていて、肝心な事があるそかになっていたのだ。

「申し訳ありません、統括官。以後、気をつけます」

「それでいい。あまりいろいろ一人で思い悩むな、尼寺。先輩の調査官も、私もいる。いつでも相談に乗るぞ」

「はい」

僕は嬉しくなって大きく頷いた。統括官も微笑んで、

「私の主な仕事は人材の育成だ。お前たちのような若い世代が育たないと意味がない。一歩ずつでいい。確実に前進しよう」

「はい」

あれほど落ち込んでいた僕は、晴れ晴れとした気持ちで署に戻った。

そして数日後、僕は一人である法人の調査に出向いた。

その税理士事務所の担当者は、まだ新人のようだ。歳も僕とそれほど変わらないと思う。

「よろしく願います」

僕はその担当者に挨拶した。

「よ、よ、よろしく願います」

かなり緊張しているようだ。目が落ち着きなく動いている。聞けば、一人で調査に立ち会うのは初めてらしい。

（僕もこんな時があったな）

自分の初調査の時を思い出す。彼の初々しさが微笑ましくなった。一人での立会いは初めてでも、税理士事務所に勤務してからは数ヶ月が経過しているから、帳簿類は見事に整理されていたし、不自然なところはなかった。大したものだ。

「！」

しかし、一つ気づいた事があった。これは税理士事務所の会計監査では気付きにくいかも知れない。

「領収書の番号が飛んでいますね、奥さん」

僕は机から顔を上げて、経理担当の社長夫人を見た。税理士事務所の担当者は、途端にピクンとなり、奥さんを見た。

「え、あの、その、えーとですね……」

あからさまに慌てふためく奥さんを見て、僕は残念ながら確信してしまった。

「切り取ったんですね、奥さん？」

あくまで穏やかに指摘する。奥さんは消え入りそうな声で、

「はい……」

と答えた。税理士事務所の担当君は、すっかり舞い上がってしまい、オロオロするばかりだった。彼もまた、「寝耳に水」だったのだろう。

「それはどこにありますか？」

僕は席を立ち、奥さんに近づいた。

「こ、ここにありません」

奥さんは、お茶菓子が入っている大きな缶を差し出した。なるほど、こんなところに保管していたのか。

「確認させて下さい」

「はい」

もう奥さんはすっかり小さくなってしまい、僕の顔を見ようとしていない。担当君も口をポカンと開けたままで、何も言わない。

領収書の「抜き」は、毎月日常業務的にこなす税理士事務所の会計監査の盲点を突いたものだった。巧みと言えば巧みだが、結局こうしてわかってしまうのだから、どれほど無意味な事が理解して欲しい。

抜かれた領収書の合計金額は、占めて三十万円。一人一人を雇えるくらいの額だった。

「これは同時に役員報酬と看做みなされます。社長の所得税の修正申告もしていただく事になりますよ」

本当ならこの「抜き」の額は、役員報酬の中でも法人の経費にならない「役員賞与」に認定するべきだが、額も少額で、奥さんの態度も協力的だったので、そこまではしたくない。統括官への報告にはその旨も入れる事にした。

要するに、隠した三十万円は消費税の課税漏れだけではなく、役員報酬としての経費も否認する場合があるという事だ。しかも、過少申告加算税や延滞税、場合によっては重加算税も追徴され、隠した金額など吹き飛んでしまう。脱税は割に合わないのだという事をしっかりと心に留めて欲しい。

僕は奥さんに社長を呼んでもらい、税理士事務所の担当者も含めて、今回の件を説明した。社長は反抗するかと思っただが、

「見つけてもらってよかった。もし気づいてもらわなければ、味を占めて続けていたろうから」

と言ってくれたので、ホッとした。

僕は署に戻り、統括官に報告した。

「そうか。そのフォローの仕方は良かった。尼寺、よくやった」

「ありがとうございます」

僕は深々と頭を下げた。

「これからその調子で仕事をしてくれ」

「はい」

やっと一歩踏み出せた。そう思った。

そして帰宅時。珍しく、携帯が鳴った。しかもこの着信音は……。
(まさか……)

もう二度とかかってくる事がないと思っていた人からだ。

藤村蘭子さん。僕の高校時代の片思いの女性にして、仕事上の最大のライバル。

何だろう？ 何の用だろう？ 僕はドキドキして出た。

「もしもし」

「ああ、久しぶりね、尼寺君。元気そうね。ご活躍、聞いているわ」
藤村さんの声は相変わらず耳に心地良い。聞き惚れてしまう。

「ありがとう、藤村さん。で、ご用件は？」

僕はつい、そんな愛想のない応対をしてしまった。藤村さんのクスクス笑う声が聞こえる。

「何よ、畏まって。そんなに私の事が怖いの？」

怖くないと言えば嘘になるが、そんな事は言えない。

「そ、そんな事はないよ。そう聞こえたのなら、謝ります」

「それよ、それ。その言い回しが、そういう印象を与えるのよ、尼寺君」

確かにそうかも知れない。しかし、どうしても彼女と話すと、卑屈になる自分がいる。

「尼寺君も忙しいだろうから、手短に言うわね」

「うん」

僕は思わず唾を飲み込んだ。

「今日、尼寺君が調査に行った法人の担当者、私の従弟いとこなの」

「ええ！？」

僕は仰天した。何、それ？

「随分と、可愛がってくれたみたいね、彼を？ この仕返しは必ずさせてもらうから、覚悟していてね」

「いや、その、別に、そんな……」

情けないが、すっかり狼狽うろたえている。すると藤村さんが笑い出した。

「ごめん、ビックリした？ 脅かすつもりはなかったんだけど、尼寺君があまりナイスリアクションだったから……」

堪え切れないという感じで、藤村さんは笑っているようだ。

「彼にはいい勉強になったらしいわ。貴方に感謝してたわよ」

「そ、そう」

ホッとした。藤村さんに「仕返し」なんて言われると、本当に寿命が縮みそうだ。

「今度飲みにも行かない？」

「え？」

「何よ、私とは飲みに行けないの？」

藤村さんは相変わらずだ。

「私、もう貴方の税務署の管轄の関与先を担当していないから、大丈夫よ。心配ないわ」

「あ、そう」

それなら断る理由はなさそうだが、何故か怖い。

「また連絡するね」

そして通話が切れた。

「はあ」

まだ彼女に振り回されている僕。あれ？ でも、飲みに行かないって言ったよな？

期待していいのかな。

いや、過度な期待は、その反動も大きい。

僕は気長に藤村さんからの連絡を待つ事にした。

調査ファイル5 杉並自動車板金塗装の場合

僕は尼寺務。H税務署勤務の税務調査官だ。

先日、ようやく満足の行く調査ができて、一步前進と思ったのだが、二歩後退しそうだ。

それは何故かというと……。

「ええ！？ 統括官の上司だった人ですか？」

僕は、つい大声を上げてしまっていた。

「そうだ。若いうちに税務署を辞めて、税理士に転進した人で、あちこちの税務調査官が泣かされている。とにかく、こちらの手の内を知り尽くしているからね」

いつもは僕を励ましてくれる統括官が、とても弱気だ。

「調査、やめた方がいいですか？」

僕はすっかり怖気づいていた。調査に入る予定の法人の担当税理士に連絡した後にそんな事を言われればテンションが下がってしまう。

「そんな事できる訳ないだろう！ 馬鹿な事を言っな、尼寺！」

統括官は僕の気の抜けた顔を見て怒鳴った。

「も、申し訳ありません！」

慌てて頭を下げ、謝る。

「まあ、胸を借りるつもりでいくしかない。あまり気負わん事だ」

「は、はい」

僕はそう言われて少しだけホッとした。

「だからと言って気を抜くなよ、尼寺。お前は個人で行くのではない。税務署を代表して行くのだという事を忘れるな」

「はい」

また緊張して来た。嫌な汗が出る。

そして調査当日。対象法人は有限会社杉並自動車板金塗装だ。板金の腕が良くて、ディーラーからも依頼があるらしい。社長は昔かたぎの職人、息子はよくできた二代目。絵に描いたような優良企業なのだが、ここに調査に来たのには理由があった。

この法人と取引のある自動車販売の個人店に調査に入った同僚から、妙な話を聞いたのだ。

「おかしいんだよ。杉並板金てさ、領収証が二種類あるんだ」

領収証が二種類ある。確かに臭う。でも、何もないかも知れない。「それもさ、社名が印刷されている領収証は社長か専務のサインがあるんだけど、市販の領収証は決まって『杉並』の認印なんだ」

その怪しい領収証の発行主は、社長の奥さんだった。詳細は不明だが、どうやら奥さんが入金分を流用しているらしいのだ。

杉並板金には何かある。そう思っ勢い込んで調査の連絡をしたのに……。

何も出ないかも知れない。そんな風に思ってしまった。

「ごめん下さい。H税務署の者ですが」

杉並板金は、自宅の前に工場と事務所がある。僕は工場の中に足を踏み入れ、そこにいたつなぎ姿の社長と専務に声をかけた。

「おう、いらつしやい」

気さくな社長がにこやかな顔で応じてくれる。

「こちらへどうぞ」

専務の息子さんも、愛想がいい。何だか気が引けて来る。

「お待ちしてましたよ」

事務所に通されると、ソファに座っていた好々爺といった感じのスーツを着た男性が立ち上がった。

奥から奥さんが出て来た。緊張しているのが見て取れる。あの販売店から、何か情報が入っているのだろうか？

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

「安達税理士事務所の安達です」

僕は身分証を提示し、安達税理士は名刺を差し出す。

「社長にこちらに来るように伝えて下さい」

安達さんは名刺をテーブルの上に置きながら、奥さんに言った。

「は、はい」

奥さんは妙にソワソワしながら、事務所から出て行く。

「上司から聞きました。安達先生は、ウチのご出身だそうで」

僕は向かいのソファに座りながら切り出した。

「そうです。でも、もう何十年も前です。私も知った顔も少なくなりましたよ」

温厚そうな人だ。「税理士となる資格を有する者」としては、税理士試験に合格し二年以上の実務経験を持つ者、二十三年以上税務署に勤務し指定研修を受けた国税従事者（要するに税務署OB）、公認会計士、弁護士があり、税理士名簿への登録を受けることによつて「税理士」となり、税務を行う事ができる。安達さんは、税務署出身の税理士だ。先日出会った敵意剥き出しの税理士とは違う。あの人は試験に合格して税理士になった人らしいから、余計敵対意識が強いのかも知れない。税務署は納税者の敵ではないのだけど。その辺を勘違いしている人は、思った以上に多い。

やがて杉並社長が事務所に入つて来て、身上調査を開始する。中学を卒業してそのまま近所の板金業者に就職。仕事を一通り覚えた頃にその経営者が他界。子供達が事業を継がないため、杉並さんが引き継ぐ形になった。

しかし、事業は順風満帆とは行かず、結局その業者は倒産してしまふ。

失意のどん底にあつた杉並さんを救つたのが、当時その業者の一番の取引先だったディーラーだった。杉並さんはディーラーの支援を受けて「杉並板金」を開業した。

初めは厳しい日々が続いたが、やがて仕事は軌道に乗り、稼げるようになったという。そして、息子さんが跡を継ぐ事になったので、安達先生の勧めもあり、法人にしたとの事。

苦勞人だ。僕には眩しいくらいの人だ。

「それでは、帳簿類は午後に見せていただきますので」

僕はそう言つて席を立ち、事務所を出た。

いつになくやりにくい。社長と専務は本当にいい人で、全うな仕事をしているのがわかる。問題は奥さんだ。来た時から、一度も僕の顔を見てくれない。後ろめたい事があるとは思えない。そして、その事を社長も専務も知らないようだ。安達先生はどうなのだろうか？ 気づいているのだろうか？ それとも、僕が事務所を出た後、奥さんに尋ねたのだろうか？

そんな事をいろいろと思い巡らせていると、たちまちお昼休みは終了した。

（もし、僕が安達先生の立場だったら、どうするかな？）

ふとそんな事を考えてみた。

そして事務所に戻る。安達先生達の顔を見渡すが、特に何もわからない。奥さんは相変わらず僕を見てくれない。何も話していないのだろうか？

「では、帳簿類を見せていただけますか？」

僕のその言葉で、奥さんがビクツとしたのがわかった。安達先生が立ち上がり、奥さんに近づく。

「それと、それと、それ。あと、そっちの棚のものも」

先生が的確に指示する。奥さんがあたふたしているのを見かねたようだ。

「ど、どうぞ」

奥さんがテーブルに帳簿類を並べた。相変わらず僕の顔を見ない。嫌われてるのかなと思ってしまう。

「？」

噂に聞いていた市販の領収証がない。どうしよう？ 何て切り出せばいいのだろうか？ 取り敢えず、出されたもののチェックを始める。

出納帳、元帳、請求書、納品書、たな卸し表と、帳簿は一見完璧

だ。只一つ、市販の領収証を除いて。

「これだけですか？」

僕はカマをかける作戦に出た。何かを知っている事を匂わせるのではなく、奥さんの動揺を誘うのだ。自分からボ口を出させないと「こ、これだけです」

奥さんは僕の目を見ないで答えた。安達先生が、

「何か、ご不審な点でも？」

と間に入るように尋ねて来る。奥さんの不自然な様子に気づいたのだろうか？

「いえ、別に」

ここはとぼけよう。しかし、次の一手がない。僕は事務所の中を見回す。

「！」

同僚から聞いた個人の販売店のカレンダーがある。僕はそれをジツと見た。安達先生は僕のその行動に意味があるとは思わなかったようで、何も聞いて来ない。しかし、奥さんは違っていた。落着きなくキョロキョロし、僕を見たり、カレンダーを見たりしている。「このカレンダーなんですけど」

僕は世間話でもするように言った。

「は、はい」

奥さんの声がいつもより甲高いので、社長と安達先生がハツとして見る。

「このお店とは取引が多いようですね」

「は、はい」

安達先生と社長が顔を見合わせる。

「尼寺さん、どういう事です？ 何かお知りになりたいのですか？」
安達先生が堪りかねたように切り出した。

「いえ、別に。カレンダーをくれるくらいだから、上得意なんだろうなと思っただけです」

どうやら、安達先生は何も知らないようだ。奥さんは顔色が悪く

なっている。

「領収証なんですけど」

僕は奥さんを真っ直ぐに見て言った。奥さんの顔が更に硬直する。
「もう一種類ありますよね？ それはどこにありますか？」

「いえ、あの、その……」

奥さんは完全に目が泳いでしまっていた。社長は何の事が全くわかっていないようだが、安達先生は何かに気づいたようだ。

「領収証はこれだけですよね、奥さん？」

あの温厚そうな安達先生が顔を紅潮させて僕を睨んで言った。

「いえ、あのその……」

奥さんが口籠るので、今度は社長が、

「おい、どういう事だ？ 何で答えない？」

と奥さんに詰め寄った。

「社長、落ち着いて。ここは私が」

安達先生が慌てて社長を止める。社長はますますわからないという顔になる。

「尼寺さん、領収証がもう一種類あるというのは、どういう事です？」

「詳しい事はお教えできませんが、奥さんがご存知なんです」

一斉に視線が奥さんに集まる。奥さんはパニック寸前だった。

「あ、あの……」

それからまもなくして、奥さんは全部話してくれた。集金した金を全部会社にいれずに、パチンコに使ってしまった事を。売上を誤魔化していたのではないので、結局修正申告には至らなかったが、奥さんの年末調整をやり直してもらう事にはなりそうである。使ったお金を給料として加算し、所得税の計算をし直すのだ。

「お前なあ」

苦労を共にして来た社長は、呆れた顔をしたが、怒ったりはしなかった。

「金が欲しいなら、俺に言え。使い込みなんてするなよ、みつともない」

「はい」

奥さんは社長の優しい言葉に泣き出してしまった。僕もいたたまれなくなってしまった。

「では、私はこれで」

僕はすぐに事務所を出た。何だか、僕のせいで奥さんが悪者になっってしまったので、後味が悪かったからだ。

「尼寺さん」

安達先生が追いかけて来た。

「は、はい」

何か言われると思い、僕は緊張した。すると安達先生はにこやかな顔で、

「いい調査官になって下さいよ。期待してます」

「は、はい！」

安達先生はそれだけ言うと、右手を挙げ、事務所に戻って行った。もしかすると、安達先生は、ずっと税務署にいたかったのかも知れない。そんな気がした。

帰署し、統括官に報告をした。

「そうか。安達さん、元気だったか」

「はい。いい勉強になりました」

統括官は僕を見上げて、

「あの人は、本当は国税査察官（所謂マルサ）になる話があったほどの人だ。でも、家族のために諦めたんだよ」

「え？」

統括官の話に、僕はギョツとした。そんな凄い人だったのか。

査察官は国税の花形だが、激務だ。家族を犠牲にする事も多いと聞く。安達さんは自分の地位より家族を選んだという事か。

「安達さんに期待されてるんだ、頑張らないとな、尼寺」

「はい」
「凄いプレッシャーかけないで下さい、統括官。僕は泣きそうだった。」

「ふーん。凄いじゃない、尼寺君」

向かいの席でほろ酔い加減の藤村さんが言う。僕は「念願」叶って、高校時代の片思いの女性である藤村蘭子さんとデート……。ならしいのだが、そういう色っぽい状況ではない。ここは居酒屋の座敷の一つだ。全然そんな雰囲気ではない。周りは仕事帰りの酔っ払い達だらけだ。

「飲んでる、尼寺君？」

「う、うん」

藤村さんは、結構飲めるようだ。僕はビール一杯でクラクラしてしまうのだが。

「私も、税務署に行けば良かったなあ。今更遅いけど」

藤村さんは、焼酎の水割りをグツと飲み干した。

「尼寺君はさ、査察目指すの？」

「僕は無理だよ」

慌てて否定する。藤村さんはニヤーツとして、

「激務だもんね、査察って。家に帰れない事なんてザラらしいし」

「そうみたいだね」

僕は溜息を吐いた。

「私と仕事、どっちを取るのよ!？」

そんな事を言われる立場になつてみたい。無理だけど。

「私は、大丈夫だよ」

「え？」

何を突然？ 完全に出来上がってる、藤村さん？

「私は、仕事優先OK。全然、気にならないよ……」

意味不明の事を言い放ち、藤村さんは潰れてしまった。ビール五杯、焼酎の水割り七杯。凄いなあ。

よろよろする藤村さんを何とかタクシーに乗せ、僕も寮に向かう。

『私は、仕事優先OK。全然、気にならないよ』

どういう意味なんだろう？ 私は貴方が家に帰って来なくても大丈夫？ まさかね。私ならそんな激務でも大丈夫、だろうな。
どうしても前向きに考えられない僕だった。

調査ファイル6 対馬不動産の場合

僕は尼寺務。H税務署勤務の税務調査官だ。最近、ようやく仕事に自信が持てるようになった。

そして今日も業務である法人の調査に出かける。

そこは以前から脱税をしていると噂の不動産会社だった。社長がいくつもの法人を設立し、それをうまく動かして利益の操作をしていると聞いた事がある。但し、それはあくまで噂であって、関連法人や取引先法人を調査して、何かが出て来た訳ではない。

「尼寺、焦らなくていい。何か一つでもいいから、見つけてくれ」先輩にそう言われた。かなりのプレッシャーである。

「はい」

そう返事をするしかない。胃に穴が開きそうだ。

調査対象法人は、対馬^{つしま}不動産。社長は対馬暢之^{つしまのぶゆき}氏。四十五歳。不動産業界では、やり手と評されている。昔は地上げ紛いの事もしていたようだ。只、今は至って温厚な仕事をしているようだ。それも表面上だけかも知れない。

そして、関連企業は壱岐^{いき}建設。こちらは、対馬社長の義兄である壱岐忠則^{ただのり}氏が社長を勤めている。関連企業と言っても、株は互いに有してはおらず、法律上は全くの別企業である。そこがまた質^{たち}が悪いのだ。

税法は、子会社や同一役員がいる法人に対する規制を設けているのだが、この二社はそれに該当していない。壱岐建設を調査した調査官の話では、実権は壱岐氏にはなく、対馬氏にあるらしい。しかし、対馬氏は株主にもなっていないし、役員にも入っていない。とにかく、一筋縄ではいかないのだ。

関連企業はそれだけではない。伊都^{いと}設備。これは水周りの設備を販売取り付けする会社だ。壱岐建設の下請け会社だが、これも子会

社ではない。株の持ち合いはしていないし、役員の重複もないのだ。しかし、伊都設備の代表取締役は、対馬社長の奥さんの妹の夫である伊都真澄氏^{いとますみ}。関連性は自明なのだが、法律上何もできない。

普通、そういった親族繋がりの法人は、誰かが欲を出したり、裏切ったりで、大概綻びが生じるものだが、彼らに限ってはそれはない。対馬社長が余程怖いのか、それとも本当に団結力があるのか、崩れそうにないのだ。

更に、それらの法人は、全て管轄の税務署が違うのだ。それも大きなネックになっている。縦割り行政の弊害。自分達が勤務する官庁をそんな風に言うのもどうかと思うが、僕は間違いなく縦割り行政が彼らを利するものとなっていると考えている。

そしてもう一つ付け加えると、この三社は決算月が違う。対馬不動産は六月決算八月提出、壱岐建設は三月決算五月提出、伊都設備は十月決算十二月提出。利益の先送りが無限にできてしまう仕組みだ。しかも、合法的に。

切り込む隙があるとしたら、そこだ。人間は必ずミスをする。書類上の手続きミスで、それが明らかに架空の取引で、利益の先送りだという事が判明すれば、このからくりの全貌を暴く事もできる。

僕は急に気分が高揚して来て、対馬不動産のあるビルの玄関に着いた時は、

「絶対に見つけてやる！」

と決意していた。

対馬不動産は、雑居ビルの五階を賃借し、そのフロアを全て占有している。登記簿を調べても何も見つからないのだが、本当のビルのオーナーは、対馬暢之氏らしい。その辺りも抜け目がないようだ。フロアは全て繋がっていて、反対側に僅かなスペースの「社長室」とプレートが貼られた別室があるだけだ。社員の動きを瞬時にして把握したいという対馬社長ならではの考えなのだろう。これでは社員は息が詰まるのではないか？ その辺りにも突破口があると良い

のだが。

「お待ちしておりました」

フロアの入口の脇にあるソファに座っていた胡麻塩頭で紺のスーツを着た男性が立ち上がった。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

僕はすぐさま身分証を提示した。相手の男性は、名刺入れを内ポケットから取り出すと、

「税理士の藤間とうまです。よろしく」

と僕に向けて差し出した。僕は身分証を胸のポケットにしまって鞆を床に置くと、名刺を両手で受け取る。

「よろしく願います」

藤間税理士は、そのまま歩き出して、

「社長は奥でお待ちです。どうぞ」

と言い添えた。僕は藤間さんの名刺を右手に持ち、鞆を左手に持つと、慌ててそれに続く。途中、僕と目が合った社員がにこやかに会釈する。挨拶には相当五月蠅いのだろう。僕ら税務署の人間は、多くの法人の場合、愛想良くされる事が少ないのだ。ちょっとだけ嬉しかったのは、確かだ。

「おお、いらつしゃいませ」

社長室のドアを藤間さんが開くと、机でパソコンのマウスを操作していた対馬社長が立ち上がった。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

「対馬です。どうぞお手柔らかに」

型通りの挨拶をすると、社長は名刺を携え、僕に近づく。

「税務署の方には、まさに釈迦に説法でしょうが、土地や建物をお探しの際には、どうぞ当社をご利用下さい」

「はあ」

僕は調査日当日にそんな営業をされた事がなかったので、一瞬呆気にとられたが、鞆を置き、名刺を受け取った。

「どうぞ」

社長に促され、ソファに座る。藤間さんと社長の名刺をテーブルの上に並べた。

「ウチは真面目に仕事してますよ。税金もたくさんではないけど、納めてますしね」

社長はニヤニヤしながら、藤間さんと向かいのソファに座る。すると藤間さんが、

「社長、山寺さんは別に御社を疑って来た訳ではないですよ。任意調査ですから、何年かに一度はあるのですよ」

「ほう」

藤間さんが「山寺」と言い間違えたのは気づいたが、もうその手の事は気にしない事にしている。僕が「尼寺」だろうが「山寺」だろうが、調査に支障はないからだ。

「ま、いずれにしても、あまり厳しく攻めないで下さいね、尼寺さん」

僕は只苦笑いをしただけで、返事はしなかった。社長はまだニヤついていたが、目が鋭くなった気がする。しかも、僕の名前はしっかり把握している。本当に切れる人なのだ。藤間さんは、この法人のごく一部しか知らないのだろう。このタイプの経営者は、例えば税理士にも全てを話しているとは思えないからだ。

「では、早速、社長の身上調査をさせていただきますね」

僕は長いインターバルは危険だと判断し、そう切り出した。藤間さんは驚いたようだ。

「仕事熱心ですねえ、山寺さんは。もう始めますか？ お茶でも飲んでからにしませんか？」

それは社長の言う台詞でしょ、と突っ込みたくなる。この人も、対馬社長が全部話してくれていない事は理解しているのかも知れない。だから、こんな呑気な雰囲気なのだ。

「いや、先生、私も時間が惜しいですから、すぐに取りかかってもらった方がいいです」

社長はそう言うってから僕を見た。笑顔だが、目が笑っていない。

よく聞く事だが、今の対馬社長はまさにそれだった。余裕の笑顔の裏には、警戒の炎が燃え上がっているのか？ 僕は慎重に行こうと思った。そして、ここは型通りの身上調査。社長の経歴や、会社を起こした時の経緯などを尋ねる。

「失礼します」

そこへ、秘書らしき女性がお茶をトレイに乗せて入って来た。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

女性はお茶を出すとそのまま退室した。僕はそれを確認してからちよつとしたジャブを繰り出した。

「昨年度の終盤に、社長の車が廃車になっていますが、どうされたのですか？」

ジツと社長の顔を見たが、想定内の事なのか、全く表情が変わらない。

「いやあ、ちよつとぶつけてしまいましたね。修理するにも大金がかかるという事で、廃車にしました」

「代わりの車を購入されていないようですが、不便ではないですか？」

僕の更なる指摘にも社長は動じていない。

「この不景気で、ウチも資金繰りが厳しいのですよ。車はリースにしました。その方が安上がりですので」

「なるほど」

このジャブは空振りだ。社長は、僕の思い込みかも知れないが、ニヤリとしたように見えた。

「では、帳簿類を見せて下さい」

「わかりました」

社長は自分の机の上のインターフォンを操作し、

「書類を持ってきてくれたまえ」

「はい」

女性の声が応じた。

「やはり、ここ数年は厳しいですね、不動産業界も。私達は、今生き残りを懸けて戦っているところなんですよ」

社長はソファに戻りながら言った。僕は頷きながら、
「そうですか」

とだけ答えた。その時、女性三人がダンボール箱を持って入って来た。経理の担当者達だろうか？

「取り敢えず、三年分と伺っておりますが、それでよろしかったですか？」

目の前に置かれたダンボールを見て、社長が尋ねる。その答えを待つように、女性達が僕を見る。

「はい。時間が限られていますので、そのくらいで」

「わかりました」

社長が目で合図をすると、三人の女性達は会釈をして退室した。

「それにしても、先生や尼寺さん達には感謝します」

「は？」

藤間さんと僕は、異口同音に声を発してしまった。何の事だ？

「毎日数字と睨めっこしているご職業の方には、敬意を表します」

社長は微笑んで言う。しかし、心からそう思っていない事は僕にはわかった。

「なるほど、そういう事ですか」

藤間税理士の呑気さは、もしかして演技なのかと疑ってしまった。しかし、対馬社長も不動産業なのだから、数字と睨めっこする仕事だと思っただが？ やはり、どこか人を食ったような物言いの人物だ。

僕はそんなどうでもいい事を頭から追い出し、早速前年度分の帳簿類を見始めた。片手で書類を広げ、片手でメモを取る。社長はその間、片時も僕から目を放さない。藤間さんは、ボンヤリとあちこちを見ている風だったが。

さすがに噂になるだけの事はある。不景気だと言っていたが、相当数の土地取引をこなしていて、決して資金繰りに困っているよう

には見えない。そして、不正をしている法人に多く見られる傾向だが、帳簿類に訂正箇所が一つもない。これは、間違ったところを見え消し（訂正する数字を赤の二本線で消す事）するのではなく、一ページを丸ごと差し替えている可能性がある。しかし、証拠がない。そう思われるだけでは、如何ともし難い。その上請求書や領収書関係は、不正の影すらない。

（ダメか、ここは？）

嫌な汗が出る。申告是認。調査をしたが、何も見つからなかった時の事をそう言うのだが、今回はその可能性が出て来た。このところ、調査を勝ち負けで区分けするのはおかしいのだが、一応連勝していたので、少しシヨックだった。

昼食を取ってから午後も詳細に帳簿に目を通したが、何も見つからない。唯一怪しかった社長の車の処理も、間違いなく廃車されており、問題は見つからない。焦りだけが心の中で増幅して行く。チラッと社長を見ると、不敵な笑みを浮かべて僕を見ていた。

（見つけられるものか）

そう言っているように見えてしまったのは、僕の癖みだろうか？
その時だった。

「パパ、いる？」

不意にドアが開き、茶髪の女の子が入って来た。容貌と「パパ」という言葉から、社長の娘だろう。身上調査で聞いた長女的美香さんと思われる。

「何だ、美香！ 誰が入っていいと言ったんだ！？ 今日には税務署の方が来ると伝えてあっただろう！？ 今すぐ出て行け！ 家に帰るんだ！」

さっきまでの社長はどこかに行ってしまったのかというくらい、対馬社長は激昂していた。

「え、え？」

美香さんはまさかそれほど怒られるとは思っていなかったのだろ

う、オロオロしている。

「私の言った事が聞こえなかったのか！？ とつと家に帰れ！」
社長の剣幕に気づいたのか、さっきお茶を持って来た女性が慌てて駆け込んで来て、

「美香さん、さ、こちらへ」

と彼女を連れ出した。

「いやあ、申し訳ない。礼儀知らずで困った娘です」

社長はまた穏やかな顔に戻っていた。藤間さんを見ると、彼も仰天しているようだ。

「あ、いえ、そんな……」

僕も一緒に怒られた気分だった。

結局、僕は何も見つけられないまま、対馬不動産を出た。

（何だろう、このモヤモヤは？）

何か引つかかる。どうしてだろう？ 何か不自然な感じがする。そうだ。社長のあの変貌ぶりは異常だった。問答無用で怒鳴りつけ、何も言わずに娘を追い返した。あれは、絶対に何かある。美香さんが何か知っているのか？ しかし、美香さんは扶養家族で、役員にはなっていない。社長夫人すら役員に名を連ねていないのだから、当然だろう。ではどうしてあれほど美香さんを怒鳴ったのか？ 僕はその理由を考えた。

「あれ？」

ふと目を上げると、ビルの地下駐車場から出て来る黒塗りの乗用車が見えた。

「美香さん？」

若い子には不似合いの黒塗りの大型車だ。その時、僕の身体は電気に打たれたようになった。

「そういう事か！」

僕は大きく署に戻った。そして、陸運事務所に電話をした。

翌日、全てがわかった。

僕の睨んだ通りだった。美香さんの乗っていた乗用車は、廃車した社長の車だったのだ。つまり、廃車は偽装で、すぐに新しいナンバーで登録をし直し、それを自家用車としていたのだ。まさに抜け穴だった。これはすなわち、「減価償却資産の除却損」を偽装計上した事になるのだ。要するに脱税である。

社長が激昂したのも頷ける。僕に車を見られれば、感づかれると思っただのだ。しかし、社長の願いも虚しく打ち砕かれた。父親にあまりにも理不尽に怒鳴られた美香さんは、あの後しばらく、車の中で友人達に愚痴メールを送り続けていたらしい。だから僕が引き上げる頃になって、のこのこと駐車場から出て来たのだ。まさに「運の尽き」である。

こうして、対馬不動産は偽装廃車を突破口にいろいろと不正が見つかり、やがては国税局査察部（通称マルサ）まで動き出した。そうになると、僕ら税務署の調査官はお役御免だ。何も手出しできなくなる。それは別にいい。とにかく、不正が暴かれて良かった。出世欲はない僕には、手柄をマルサに横取りされたという感覚はなかった。

「最近、尼寺君、凄いわねえ。尊敬しちゃうわ」

酔っ払って頬がピンクに染まった藤村蘭子さんが言った。例によって、また居酒屋だ。憧れの人だった蘭子さんと一緒に飲めるのは嬉しいのだけれど、本当はもっとお洒落なバーとかで飲みたいのだ。自分が下戸なのはわかってるけど。

「運が良かったただだよ。娘さんに感謝しないとね」

「謙虚ねえ。惚れちゃいそう」

また始まった。藤村さんの悪い癖。酔うと僕をからかう。やめて欲しい。僕はノミの心臓なのだから。

「そんな事言っと、本気にしそうだからやめてよ」

僕は藤村さんの発言はあくまで冗談という前提で言った。

「本気にしてよ」

「え？」

驚いて聞き返すと、藤村さんは酔い潰れていた。またタクシーを拾ってあげないと。

藤村さんをタクシーに乗せ、一人寂しく寮へと歩き出す。

「あれ、本当なのかな？」

藤村さんの「本気にしてよ」の声は、一晩中僕の頭を駆け巡った。

調査ファイル7 きさらぎ食堂の場合

僕は尼寺務。H税務署に勤務している。今日もまた、法人の調査の準備中である。

その法人は「有限会社きさらぎ食堂」。一部の人達には、その途轍もなく強烈な盛りの多さで有名ならしい。食事は倒れない程度に採れば良いと考えている僕には、全く無縁の場所だ。

総勢三名で切り盛りしている、ごく小さな食堂である。社長の如月啓一氏、奥さんの純子さん、社長の母親の光恵さん。役員は社長のみで、奥さんとお母さんは従業員扱い。税法上、こういったスタイルの法人は、「過大賞与」などが指摘される事が多い。要するに社会通念上あり得ない金額のボーナスを、従業員とは名ばかりの家族に支給し、法人税を少なくする方法だ。現在は、法人税率と所得税率の開きが狭まったため、危険を冒してまでするような裏技ではなくって来ているのも事実だが、きさらぎ食堂は、そんな姑息な事はしていない。奥さんもお母さんも、同一業種と比べて、給与も賞与も極端に高い訳ではない。もちろん、多少は多く出しているが、それも許容範囲内だ。指摘して修正してもらうほどではない。

では、何故きさらぎ食堂を調査する事になったのかと言うと、「密告」なのだ。匿名で、

「きさらぎ食堂は、脱税をしている」

という電話が、地元の新聞社にあったのだ。それを受けて、その記者が我が署に取材に来たのだ。

そうになると、調査に行かざるを得ない。もし、その情報を無視して、その後で本当に脱税が発覚したら、H税務署がマスコミに吊るし上げを食う事になりかねないからだ。

「何も掴んでいないんですか？」

新聞社の記者は、如何にも情けないという顔で言い放ったそうだ。「税務署は警察とは違うんです」

取材に対応した統括官もムツとしたらしい。

「でも、客のフリをして様子を調べたりしますよね、税務署さんも？」

映画の「マルサの女」でも観たのだろうか？ 確かにそういう調査はできるが、それで何かわかる事の方が珍しいのを、その記者には理解できないようだ。

「しっかり見届けさせていただきますからね」

最後は、捨てゼリフのような言葉を吐き、記者は帰ったらしい。僕が応対したのではなくて良かった。

「頼んだぞ、尼寺」

統括官に肩を叩かれ、別の意味でドキッとした僕は、溜息を吐きそうになるのを堪え、署を出た。

きさらぎ食堂の三年分の申告書を調べてみたが、疑わしい箇所はない。社長の経歴もわかる範囲で調査したが、ごく普通の人だ。もちろん、奥さんやお母さんも変わった人ではない。

僕は万全を期すために、反面調査もした。要するに、きさらぎ食堂の取引先を調べるのだ。製粉業者、精肉業者、卸売り専門のスーパー、割り箸などの消耗品を扱う業者も調べた。

むしろ、その業者の方で不正が見つかり、その経営者達は、

「とんだとばっちりだ」

と思ったようだ。無論、僕はきさらぎ食堂の反面調査だとは言っていないので、彼等にはどうして僕が調査に入ったのかまではわからない。

「変だなあ」

いくら探しても、きさらぎ食堂が脱税をしている気配を感じる事はできなかった。

そして、とうとう本丸に乗り込むのだが、何となく結果が見えていて気が重い。何ヶ月か前の、悪夢のような連敗地獄が頭の中を過ぎる。

「こんにちは」

僕は、「本日臨時休業」の札が下がっている引き戸を開いて挨拶した。

「今日は休みですよ」

中のテーブルで頼杖を突いてテレビを見ていた社長が言った。五十代後半のはずだが、激務なのか、もっと老けて見える。僕は苦笑いして、

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

と身分証を提示した。社長はビクツとして立ち上がり、

「あ、いや、失礼しました。どうぞ、おかけ下さい」

と椅子をテーブルから引き出し、腰に下げていたタオルで拭いた。

「ありがとうございます」

僕は会釈して椅子に腰を下ろす。

「おーい、母ちゃん、税務署の方が見えたぞ」

「はい」

奥から声が答える。「母ちゃん」とは、どっちだろう？ ふとそんな事を考えてしまった。

「税理士の先生は、立ち会われないのですよね？」

一番不思議に思った事を切り出す。普通、納税者は不安だから、必ず税理士に立会いを依頼するものなのだ。何故か如月社長は、それを拒否したらしい。

「ええ。立会い報酬が一日三万円とか言われたので、「冗談じゃない」と思って、断ったんですよ」

社長は苦笑いして答えた。なるほど、そういう事か。多くの税理士事務所が、一時間当たりいくらかで請求する調査立会い報酬は、もっと高額になるケースもあるが、一日三万円は、小さな食堂には負担が大きい。自分達が三万円売り上げるのにどれほど汗を流しているのかを考えると、

「冗談ではない」

と思うのも当然だろう。

「いらつしゃいませ」

お盆にお茶を淹れた茶碗を二つ載せ、奥さんが現れた。なるほど、「母ちゃん」は奥さんの事か。

「おつかあは？」

社長がお盆から茶碗を持ち上げて、僕に差し出し、自分の分を口に運びながら尋ねる。

「ありがとうございます」

僕は熱い茶碗を慌ててテーブルに置き、そっと指を耳たぶに当てた。

「お義母さんは、まだ起きられないよ」

奥さんが答えた。社長は僕を見て、

「いやあ、母親が風邪ひきましてね。熱が下がないんですよ」

「そうですか。ご心配でしょう」

僕がそう言つと、

「鬼の霍乱て奴です。普段は殺しても死なないようなババアなんですよ」

社長はいくら何でも言い過ぎだろうというような悪口を言つてのけた。

「聞こえるよ、あんた！」

奥さんが奥に帰りながら窘める。たしなどうやら嫁姑の関係も良好のようだ。

「聞こえたつていいさ」

社長は全く悪びれる様子もない。いい親子関係なのかも知れない。「取り敢えず、帳簿類を見せていただけますか」

社長の身上調査は事前にすませてあるので、今日はいきなり帳簿に取り掛かる事になっていた。

「はいはい」

社長がどっこいしょと立ち上がり、厨房に消える。それと入れ違いに奥から奥さんが戻つて来た。

「すみません、お恥ずかしいところをお見せして」

「いえ」

僕は只愛想笑いをするだけだ。むしろ微笑ましい光景に思えたのだから。

「はいよ、帳面ね」

社長は厨房から、ラーメンのスープやら、カレーの染みやらがこびり付いた段ボール箱を持って来た。

「この中に一式入っているから、適当に探して下さい。ちょっと仕込みをしたいんで、いいですか？」

「はい」

社長はまた厨房へと消えた。

「全く、せつがちが服着て歩いてるような人なんですよ」

奥さんが溜息混じりに言う。そして、

「私がついていた方がいいですか？」

「ああ、いえ、お義母さんに付き添ってあげて下さい。わからない事があれば、声をかけますので」

「わかりました」

奥さんは会釈して奥へ行った。こうして僕はガランとした店内に一人になり、帳簿類との格闘を開始した。

さすがに日銭の商売だけあって、現金出納帳の量が半端ではない。一ヶ月だけで三十ページくらいある。これが三年分かと思うとゾッとする。もちろん、調査は明日もあるから、今日で全部見る必要はないのだが、ハイペースでいかないと、他の書類まで手が回らない。日々の売上も多いが、細々とした買い物も多く、スクラップブックにこれでもかとレシートや領収証が貼られている。見落としてしまいそうなくらい、ビッシリと貼り付けられているので、一枚一枚をチェックするのが容易ではない。

「む？」

コンビニでキッチンタオルを買っている。それだけならいい。それに紛れて、タバコも買っていたのだ。すかさず付箋紙を貼る。

「あれ？」

でもその直後、出納帳の方に、
「タバコ売上」

と同額で入金がある。お客に頼まれてタバコを買って来たのだろうか？

「ふう」

思わず溜息が出てしまう。

（これは久しぶりに申告是認かな？）

お客に頼まれたタバコまで帳面を通しているのだ。正直過ぎる。消費税課税業者ではないから、あまり関係はないのだが。これほど細かく現金管理をしているのだ。不正をしているとは思えない。僕はドンドンテンションが下がるのを感じた。

一ヶ月分の現金を追うだけで、一時間くらいかかった。これでは一年分を見るのが精一杯だ。身上調査を事前において正解だった。

「おや？」

何か不自然な気がする。何だろう？ 具体的に何が、という訳ではないのだが、妙な気分なのだ。もう一度、スクラップブックを見る。でもわからない。何かが変だと思ったのだが、結局わからないまま、その日の調査は終了した。

「また明日来ます」

「お疲れ様でした」

社長と奥さんに見送られ、僕はヘトヘトな身体を引き摺るようにして、きささぎ食堂を出た。

「あれ、臨時休業じゃないの？」

偶然店の前を通りかかった人に尋ねられた。僕はハツとして、

「あ、いえ、僕はお客じゃないので」

と咄嗟に業者のフリをした。するとその人は、

「何だ、そうなの。じゃあ、夜も休みかな」

と呟き、立ち去った。

「？」

どういう意味だ？ 「夜も休みかな？」 って、何かおかしい日本語だ。僕はすぐさまその人を追いかけた。

「あの、ちよつといいですか？」

僕は身分証を見せて、その人を呼び止めた。

「げ、税務署！」

何故か驚愕された。聞いてみると、その人はフリーターで、収入があるにも関わらず、申告をしていないのだとか。

「それはまた後で、別の部署の者がお尋ねしますので」

僕はその人の住所と名前だけ控えた。

「夜も休みかなって、どういう意味ですか？」

僕の質問に、その人は緊張したようだ。別にそこまで恐れなくてもいいと思うんだけど。

「きさらぎ食堂は、一旦閉店してから、夜の部が始まるんですよ」

「夜の部？」

まさか、水商売？

「何ですか、それ？」

「大食い選手権です」

大食い選手権？ 何だ、それ？

どうやらきさらぎ食堂は、通常業務の他に、深夜になると「大食い選手権」と銘打って、

「食べ切れなかったら、倍返し」

という、賭け事めいた事をしているらしい。それが何かの法に触れるかどうかはわからないが、一旦店を閉めてから、深夜に業務を再開するという情報は貴重だった。その分の売上は除外されている可能性が高い。あそこまで出納帳を事細かにつけられるのだから、二重帳簿を作っている可能性すらある。

僕は署に戻ると統括官に報告し、深夜きさらぎ食堂に行ってみる事を話した。

「なるほど。それは怪しいな。すまんが、頼む。また明日、結果を

報告してくれ」

「はい」

僕は一人暮らしの気楽さもあり、きさらぎ食堂がもう一度開店する午後十一時まで、近くのファミレスで時間を潰す事にした。

「コーヒーのお替り、如何ですか？」

最初は笑顔だったウエイトレスも、僕が夕食の後、何も頼まずに長時間居座っている事に気づくと、一切声をかけて来なくなった。現金なものだ。まあ、それが商売というものだろうけど。

そして、遂に待ちに待った午後十一時。僕は精算をすませ、ファミレスを出た。

きさらぎ食堂の近くまで来ると、人だかりができているのに気づいた。さっき店を出た時は、こんなに人間が集まるところには見えなかったのに、今はまるで「行列のできる名店」のようだ。最後尾を探しながら、店の様子を覗いてみる。

「さあ、次の挑戦者の人！」

女性の声が響く。奥さんじゃない。誰だ？ 不思議に思いながら、最後尾に並ぶ。

「ここはいつもこのくらい混んでるんですか？」

僕は前に並んでいる学生風の男性に尋ねた。

「ええ、そうですね。初めてなんですか？」

「はい」

するとその学生は得意そうにニヤツとして、

「もつと混雑する時もありますよ。月末は、三倍返しなんです」

「三倍返し？」

僕は鸚鵡返しに尋ねた。学生は頷き、

「そうです。負ければ三倍払う事になりますが、勝てば代金が只になつて、三倍戻って来るんですから、ばくら学生には、本当にありがたいシステムですよ」

「はあ」

確かにそうかも知れない。僕は食が細い方だから、どんなにお金に困っても挑戦しようとは思わないが、「胃袋」に自信がある人なら、挑戦してみたくなるだろう。

「多分、ビックリすると思いますよ。本当に、馬の餌みたいな量が出て来ますから」

学生はまだいろいろと話していたが、すでに僕は只頷くだけで、まともには聞いていなかった。

しばらく経って、僕はその学生と共にきさらぎ食堂に入った。時間は十二時を回っていたので、同じ日に二度目の入店とはならなかったが、僕の姿を見つけた時の社長の仰天ぶりは、本当にカメラに収めたくなるほどだった。風邪で寝込んでいたはずの社長の母親も、元氣そうに動いていた。彼女は僕を見ていないので、どうして自分の息子が僕を見て固まってしまったのか、全くわからなかったようだ。

そして、きさらぎ食堂の夜の部が終了したのは、深夜二時だった。母親の光恵さんは、深夜までの営業があるため、日中仮眠をしているのだそうだ。だから、調査に訪れた時、顔を出さなかったのである。

社長はすぐに観念した。言い訳もしなかった。潔いと言えば聞こえがいいが、さすがにジタバタして言い逃れができる状態とは思えなかったのだろう。表の営業で見せてもらった、あの几帳面な出納帳は、夜の部でも大活躍しており、詳細に売上げと支払いが記されていた。

「申し訳ありませんでした」

社長は涙こそ流さなかったが、本当に反省していた。その顔は、ようやく楽になれる、という顔だった。

昼間は奥さんが切り盛りし、夜は母親が補助する。そして、社長がその細かい性格を存分に生かし、出納帳を作る。これほどの見事な連携を、どうしてももっとうまく生かす方法を考えなかったのだろ

う？ 脱税をする人達の共通点として、彼等は決して自分達のしている事が発覚するとは想像していないという事が挙げられよう。何件もそういう現場に立ち会って、それをしみじみ感じた。

僕は翌日、統括官に報告をした。

「そうか。待った甲斐があつて良かったな、尼寺」

「はい」

「今日はもう帰って休め。本当にご苦労だった」

統括官の嬉しい一言で、僕は一気に睡魔に襲われた。そしてそのまま署を出て、寮に戻り、泥のように眠った。

夜になり、そんな僕を起こしてくれたのは、あの着メロだった。

「寝てたの？」

僕の片思いの人である藤村蘭子さんは、例によって居酒屋への召集をかけて来た。

「うん。昨日は深夜まで仕事だったんだ」

「そうなの」

藤村さんは、「やめとく？」と言ってくれたが、僕は召集に応じ、居酒屋に向いた。

「ホントにお疲れ、尼寺君」

僕が到着した時は、テーブルに生中のジョッキが三つ空になって並んでいた。

「遅くなつてごめん」

「どうして謝るのよ？ 無理しなくていいのに」

今日の藤村さんは妙に優しい。それが返って怖いけど。

「尼寺君にかんぱーい！」

「か、乾杯」

僕は下戸だが、藤村さんと飲む時だけは、いつもよりは酒に強くなれる。

「何かさあ、尼寺君が遠くなつて行くなあ」

「どうして？」

僕はビールの苦みに顔をしかめて尋ねた。藤村さんは焼酎の空のボトルをゴロンと寝かせて、

「だって、カッコいいんだもん、尼寺君」

「は？」

また意味が分からない事を口走っているよ、藤村さん。

「久しぶりに会った時は、あんなにヘナチヨコだったのにさ」

それは言わないで。僕のトラウマなんだから。

「でも、今の方が素敵。好きになってもいい？」

どんどんエスカレートして行く藤村ワールド。彼女は翌朝、僕と話した記憶が全くないらしいのだ。だから、まともに聞いてはいけない。

「ダメ。僕はまだ仕事に生きるんだから」

最近はどうにか、藤村さんの悪魔の囁きを受け流せるようになって来た。

「ひどーい。きらーい、尼寺君」

「えっ？」

それでも、マイナス発言をされると狼狽えてしまう僕だった。

調査ファイル8 藤原鉄工所の場合

僕は尼寺努。^{あまぐしつむ} H 税務署法人課税部門勤務。彼女なし、片思いの人あり。

その片思いの人に、最近、毎週のように会っている。高校の時の憧れの人だった藤村蘭子さん。ちょっと前までは、税務調査官と税理士事務所担当者としてライバル関係だった。彼女は僕のことなんか、ライバルだなんて思っていないだろうけど。今は只の飲み仲間いや、「タクシー調達係」と言った方が正確かな？

藤村さんは、陽気なお酒なんだけど、必ず潰れるまで飲むので、始末が悪いのだ。でも、たまに連絡をとる事がある同級生に訊くと、藤村さんが酔い潰れるまで飲んだのを見た事がないそうだ。

「お前、藤村を何とかしようと思って、変な酒飲ませてるんじゃないだろうな？」

妙な疑惑を持たれた。冗談じゃない。藤村さんは、全部自分で頼んで飲んでいるんだぞ。大体、酒がほとんど飲めない僕がそんな事できる訳がない。

「まあ、諦めろ。藤村は、お前なんかと付き合ったりしないからさ」それは大きなお世話だ。そんな事は考えた事がないし、無理だつて事は自分が一番よくわかってる。彼女が引く手数多だったのは、高校の時から知っていた。只、こういう訳か、藤村さんは誰とも付き合っていないかったのかも知っている。

「あいつ、男が嫌いなのかな？」

同性愛者疑惑まで浮かんだほどだったのだ。いくら何でも話が飛躍し過ぎだけど。でも、あの久しぶりに再会した建築板金の法人では、

「彼氏と別れたばかり」
と言っていた。だから、彼女は「男が嫌い」という訳ではない。

何でそんな事を気にしているんだろう？ 僕は自分の浅はかさが悲しかった。

そして今日もまた、ある法人の調査。鉄工所だ。創業六十年で、戦後間もない頃から営業している。社長は二代目で、先代以上の切れ者という噂だ。株式会社藤原鉄工所。高層ビルから、橋げた、野球場のバックネットまで請け負う。社長の藤原理一郎氏は、六十代とは思えないくらいの若々しさで、まだ三代目に後を継がせる気がないらしい。

担当の税理士事務所に連絡する段になって、僕はギョツとした。

「こ、近藤税理士事務所？」

そこは、藤村さんがいるところ。でも、前回は実相寺税理士事務所にいたから、彼女が担当という事はないだろうと思い、受話器を取った。

「近藤税理士事務所です」

若い女の子が出た。藤村さんではない。

「私、H税務署法人課税部門の尼寺と申します」

「お世話になります」

爽やかな声でそう言われる。僕はドギマギしてしまい、

「あ、あの、お世話になります」

と慌てて答えた。そして、

「近藤先生の顧問先であります、藤原鉄工所さんの税務調査の件でご連絡いたしました。担当の方はいらっしゃいますか？」

「担当の錦織（にしき）は只今外出中ですので、折り返しご連絡致します」

その子の受け答えはとても素敵だった。僕は電話を切る時に名前を聞き出そうと思って誘導してみた。

「あの、私、法人課税部門の尼寺と言いますが？」

「私、藤村と申します」

「え？」

僕はビックリした。藤村さん？ でも、声が違う。もしかして、

声色を使つて僕をからかっているのか？ でも、出た時からこの声だ。からかうなんて事ができる状況ではない。

「では、よろしく願います」

僕は疑問を払拭できないまま、受話器を置いた。

しばらくして、担当の錦織さんから電話が入った。男だと思っていたが、アニメ声の若い女の子だった。でも、近藤先生のところは教育が行き届いているようで、とても受け答えが鮮やかだ。こちらの提示通り、調査は再来週の水木で行う事になった。錦織さんは予め先方に連絡して予定を訊き、税務署にかけて来たのだ。実に効率のいい対処の仕方だ。素晴らしい。僕が新人の頃、そこまでできていたろうか？ 軽く凹む。まあ、錦織さんが新人かどうかはわからないけど。税務署の先輩女子にも、アニメ声の人いるしなあ。

そして調査当日。僕はちよつとだけドキドキしながら、藤原鉄工所に赴いた。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

僕は事務所のドアを開いて顔を出した女性に身分証を提示した。

「お待ちしておりました。近藤税理士事務所の錦織です」

若い女性だ。この人が錦織さん？ まだ、学校に行ってそうな顔をしているけど。おつと、こんな考え方は女性蔑視だって、この前藤村さんに言われたつけ。それにしても、とても可愛い顔と声だな。「社長の藤原です」

ドアを閉じて振り返ると、錦織さんの隣に立っている男性が名刺を差し出して言った。この人が社長？ 六十代のはずなのに、どう見てもそんな歳には見えない。肌のツヤが良くて、見ようによつては四十代だ。

「よろしく願います」

僕はソファに案内され、腰を下ろした。反対側に錦織さんと藤原社長が並んで座る。

「まずは、お茶をどうぞ」

社長の奥さんだろう、僕に來客用と一目でわかる茶碗でお茶を出してくれた。

「ありがとうございます」

僕は会釈した。うん？ 何か、錦織さんがジツと僕を見ている気がするが？ 自意識過剰かな？

「ではまず、社長の身上調査をさせていただきますね」

「はい、どうぞ」

藤原社長は、堂々としている。この法人は、社長が全部仕切っているようだ。奥さんも経理の深い部分はタッチしていない。どうやら今回は、「申告是認（不正や誤りが認められない事）」の雰囲気だ。人は見た目で全部わかる訳ではないが、藤原社長は悪い事をしているようなタイプには見えない。そして、事務所の中も奇麗に片づけられており、工場も整理整頓が行き届いている。何か出るとすれば、ケアレスマスのような類いだろうが、藤村さんがいた近藤税理士事務所では、それもあり得ない。

午前中は身上調査と雑談で終わり、僕は昼食をとるために事務所を出た。

「尼寺さん」

何故か錦織さんが追いかけて来た。

「何でしょうか？」

昼食に出るだけだから、忘れ物を届けてくれた訳でもない。僕は不思議に思っ、錦織さんを見た。

「お昼と一緒にいいですか？」

「え？」

どうして？ 何でそういう展開になるの？

「え、いや、でも、税務署の調査官と、税理士事務所の担当者が二人で食事は、まずいですよ」

僕は可愛い女の子の申し出は嬉しかったけど、そこは心を鬼にしてそう言った。

「でも藤村先輩とは、一緒に食事しましたよね？」

ギク。どうしてそんな事を知ってるの？ 嫌な事を思い出してしまった。

「やっぱり、藤村先輩と尼寺さんで、付き合っているんですね」

「付き合ってますんよ」

「そうですかあ？」

どこをどう押せばそんな推理が成立するのか、と思うくらい、錦織さんの言動は飛躍している気がする。

「だったら、いいですよ、ご一緒して」

「は、はい」

これ以上妙な事を言われるのと、税理士事務所の担当者と昼食をとったのを知られるのを秤にかけ、僕は「ご一緒」を選択したのだった。

よく喋る。その一言に尽きる。

錦織さんは、藤村さんの直属の部下だったそうだった。だから、会計監査の仕方や、税務署や顧問先とのやり取り、そして電話の応対に至るまで、藤村さん直伝なのだそうだった。そんな話から、藤村さんが酒癖が悪い事、酔うと必ず僕の悪口を言う事、更には自分の彼氏が最近会ってくれない事まで、まるでジェットコースター並みのスピードで捲くし立てられた。

顔と声が可愛い子などというニヤついた出来事はどこかに吹っ飛んでしまうほど、錦織さんはパワフルだった。藤村さん二世。いや、ある意味彼女より凄いかも知れない。

「ありがとうございます」

何故か僕は錦織さんにご馳走した形になっていた。これは問題かも知れないが、今更彼女に、

「割り勘で」

とは言いにくい。ああ、藤村さんの方が何倍もやり易いよ。

そして、調査午後の部。売上関係からチェックする。請求書、契約書、見積書、納品書、領収証。それぞれを見比べながら、メモを取る。社長と奥さんはゆったりと構えていて、全く動じる様子がないが、錦織さんは忙しなく動き、僕の顔を見たり、僕のメモを覗き込んだり、自分のノートに何か書き込んだりしていた。

（何を見ているんだろう？）

僕は錦織さんの行動が気になったが、自分の仕事に集中した。

売上には、何も引つかかる事はなかった。錦織さんはそれでもノートに何か書き込んでいた。

そして次は仕入と外注費のチェック。請求書、納品書、発注書、契約書。ちよつとだけ気になるのは、手書きの請求書が多い事だ。よく見ると、外注は個人事業主が多い。所謂「一人親方」というスタイルだ。

「外注さんの出面帳は、藤原さんで管理しているのですか？」

出面帳とは、仕事をした人達の動きを把握するための表だ。どの現場に何人という具合に記して行く。

「はい。ごらんになりますか？」

社長が立ち上がる。

「お願いします」

社長が奥さんを見る。奥さんはサツと動き、大きな出面帳を持ってきた。

「はい、こちらです」

「ありがとうございます」

僕はそれを受け取り、吟味した。特に問題はなさそうだ。取越苦労かな？ 手書きの請求書を怪しんでしまうのは、一種の職業病かも知れない。

結局、そこまでで第一日目は終了した。僕は社長達に挨拶して事務所を出た。

（申告是認か）

溜息が出る。別に「申告是認」は税務署の敗北という訳ではない。しかし、もし万が一、本当は何か不正があるのにそれに気づかずに見逃したとしたら、それはまさしく由々しき事態なのだ。

（今回はそれはないな）

藤原社長と奥さんの人柄を見る限り、そんな心配は必要ないと思えた。

「尼寺さん」

僕は本当に飛び上がりそうなくらい驚いた。

「失礼ですよ、それって。女の子が声をかけたのに、ビクツてするなんて」

ゆっくりと振り返る。すると、錦織さんがニコニコして立っている。

「な、何かご用ですか？」

僕はつい後ずさりして尋ねた。錦織さんは、

「残念でしたね。多分、何も出ないと思いますよ」

「はあ」

そんな事をわざわざ言いに来たのか？ 藤村さんより性格悪いな。

「もし何か出たら、私が今日のお礼にご馳走しちやいますから」

「へ？」

何て事言い出すんだ、この子は？ そこまでバカにされると、怒る気にもならない。

「そうですか。精々（せいぜい）頑張ってみますよ」

「そうして下さい」

錦織さんはそれだけ言うと、

「じゃあ」

と駆けて行ってしまった。駆け方もアニメみたいだと思っるのは偏見だろうか？ ほんの一瞬、

「夕食と一緒にませんか？」

と言われるのを期待した僕がバカだった。

「うつうつ！」

あんなガキに！　そう思うと、急に闘志が湧いて来た。

そして翌日。何も見つからないまま、午後の部だ。得意満面の錦織さんが僕を見ている。トラウマが甦る。あの時の藤村さんの顔が……。

「あれ？」

僕はその時、思わぬ事に気づいた。給料だ。そうか、それを見ていなかったぞ！　僕は提出された申告書を鞆から取り出し、別表二（同族会社の判定に関する明細書）を見た。

「どうしたんですか？」

不安になったのか、錦織さんが立ち上がって覗き込む。しかし、社長は悠然としたままだ。僕は顔を上げて社長を見た。

「奥さんが、みなし役員に該当しますね」

みなし役員とは、以下のような条件を満たす者の事を言う。

？　経営に従事している

？　持株割合

イ・自分の属する株主グループが上位3位以内で50%超所有していること。

ロ・自分の属する株主グループが10%超保有していること。

ハ・自分（配偶者を含む）が5%超保有していること。

つまりは、多くの中小法人の場合、株主であり経営者である社長の奥さんは「みなし役員」に該当してしまうのだ。もちろん全部がそうという事ではないが。

「奥さんの給与自体は、特に高額でもなく、社会通念上許される範囲だと思われませんが、賞与に関しては、損金算入できません」

損金に算入できないというのは、「経費で落とせない」という意味だ。

「そ、そんな、あの……」

錦織さんのあの得意顔が崩壊していた。彼女はパニック寸前で、目が泳いでしまっている。

僕は土壇場で逆転勝利した。いや、調査は勝負ではないけど。社長と奥さんにみなし役員の説明をし、損金に算入された奥さんの賞与を損金不算入とした場合の計算をメモにし、手渡した。

「そうですか、わかりました」

納得してくれたのか、それとも理解できていないのかわからないが、社長はまだ動じた様子がない。

僕はその社長の態度が気になったが、別に問題にする事でもないので、また後日連絡する事を告げ、事務所を出た。

「尼寺さん」

また錦織さんが追いかけて来た。でも今回は泣きべそをかいている。

「昨日の事なんですけど」

「ああ、いいですよ、気にしてませんから」

僕は彼女に奢ってもらうつもりはない。食事に行くのは、吝かちかみではないけど。

「ち、違つんです。ホントに失礼な事を言つてごめんなさい」

「ああ」

何だ、いい子じゃないか。僕は錦織さんに好感を持った。

「自分が自惚れていたのがよくわかりました」

「そうですか」

僕は、錦織さんが泣き出すのだけは勘弁して欲しいと思っていたが、どうやらその心配はなさそうだ。

「勉強させていただきました。ありがとうございました！」

彼女は深々と頭を下げ、ダツと駆け出した。頑張つてね。そんな思いで、彼女を見送る。

そして。僕はとんでもない真実をその日の夜知る事になる。

「尼寺あ」

藤村さん、いきなり絡み酒。いつもの居酒屋だ。今日は錦織さんも同席。少しホッとしている。

「な、何、藤村さん？」

僕は目が座っている藤村さんを見て尋ねる。藤村さんは、

「あんた、ニツキにチョツカイ出さないでよね」

「は？」

ニツキ？ 少年隊のメンバーの愛称か。古いの知ってるな。

「嫌だなあ、先輩。私、尼寺さんを取ったりしませんてば」

酔いが回っているのは、錦織さんも一緒らしい。

「何言ってるのよ、ニツキ！ 尼寺君は、私の彼氏でも何でもないので！ 只のお友達！」

良かった。「お友達」か。召使と言われるかと思った。

「そうそう、尼寺さん」

錦織さんが、妙に嬉しそうだ。

「どうしました？」

僕は彼女を見た。すると錦織さんは、

「今日の調査、私は負けてませんから」

いや、だから、調査は勝負じゃないから。え？ どういう意味？

「みなし役員賞与、社長のお土産なんですよ」

「え？」

僕は意味がわからず、藤村さんを見た。すると藤村さんは、ゴロンと焼酎のビンを転がして、

「奥さんの賞与が損金不算入になるのは、わかっていたって事よ。

あの社長、いつも税務署にお土産を用意しているの」

「ええ？」

という事は、あれは故意にそうしてあったのか？ でも、何のため？

「それが税務署との良好関係を築くんですって。昔の人の考えそんな事よ」

藤村さんは、藤原社長の行為があまり面白くないらしい。僕もそ

うだ。税務調査は、そういうものではないはずだ。「持ちつ、持たれつ」の考えは間違っている。

「そうなんだ」

今日は悪酔いしたい気分だった。

やがて、錦織さんは彼氏からのメールが入り、帰ってしまった。

「尼寺君」

「何？」

二人きりになると、ビクビクしてしまう。

「ニツキは彼氏いるからね」

「わかってるよ」

僕はもしかして、などと不届きな事を考える。藤村さん、ヤキモチ？ まさかね。

「でも、私はいないから」

「え？」

またそういう事を言って酔い潰れる藤村さん。ホントに「小悪魔」だよなあ。

調査ファイル9 石動建設の場合

僕は尼寺務。^{あまじうとむ} H税務署の調査官だ。

最近、ようやく仕事にも慣れて来て、調査対象である法人に行っても、只間違いを指摘するだけではなく、フオーも入れる余裕が持てるようになった。そこまで上がったのは、言うまでもなく、上司である統括官や、先輩の方々の指導と助言があったからだ。本当に感謝している。

でも、それ以上に感謝している人がいる。藤村蘭子さん。高校の同級生で、片思いをしていた人。その人に調査で出会わなければ、僕はずっと前にこの仕事を辞めていただろう。彼女には、トラウマになりそうな思いもさせられたけど、「この仕事を続けたい」と思わせてもくれた。

今、彼女は税理士事務所が変わってしまい、残念な事にH税務署の管轄の法人を担当していない。

あ。僕は何を期待しているのだろうか？ 藤村さんとは、あくまで飲み仲間。悪くすれば、「タクシー調達係」でしかないのに。

そんなある日、僕は提出された申告書をチェックしていて、ふと目を留めた。

「石動建設？」^{いすのぎ}

その名前は、見覚えがあった。高校の同級生。そして、僕を苛めていた男。更に、藤村さんと付き合っていると噂だった男。結局、後で知った事だが、石動は藤村さんとは付き合っていなかったそうだった。

久しぶりに再会したあの板金屋の調査の時、別れたのかと思ったけど、付き合ってもいなかったと知ってホッとしたのを思い出した。「住所も同じだ。間違いない。あいつのところだ」

申告書の別表二（同族会社の判定に関する明細書）を見る。「石^{いす}

「動幸喜^{うごき}」。あいつの名前だ。更に資料を当たり、登記内容を確認する。石動は、取締役になっている。

「そうか」

僕は別に石動には何も怨みは引き摺っていない。

「げ」

驚いたことに、有限会社石動建設の顧問税理士は、近藤^{こんどう}力先生だった。

「誰が担当しているんだろう？」

あのアニメ声の錦織さんだろうか？　あまり会いたくないな。ハツとする。僕はすでに、石動建設に調査に行くつもりでいた。（何を考えているんだ、全く）

今の状態で行けば、まるで私怨を晴らしに行くようなものだ。

「どうした、尼寺？」

先輩が僕の様子を変に思ったのか、声をかけてくれた。

「あ、いえ、別に何でもありません」

「おお、それ、石動建設の申告書か？」

先輩は興味深そうな顔で覗き込む。

「はい。それが何か？」

僕は不思議に思っ^て先輩を見上げた。

「俺が今調査中の法人がさ、石動建設に巨額な貸付金をしていてさ。どうも、所得隠しじゃないかと思うんだ」

「所得隠し、ですか？」

ギョツとした。石動がそんな事に巻き込まれているのか？

「その法人の決算は三月なんだ。石動建設の決算は二月だから、その申告書には計上されていないけど、そんな妙な事が行われているのは、間違いない」

「そうですか」

僕はもう一度申告書を見た。

「尼寺、その調査に行くのなら、貸付金の事を調べてくれ。もしかすると、とんでもない脱税事件になるかも知れないからな」

「はい」

もう僕は後戻りできなくなってしまった。でも、石動、僕を覚えているだろうか？

そして僕は、統括官とも相談の上、石動建設の調査に行く事にした。

「私情は禁物だぞ、尼寺」

「はい」

統括官の指摘は当然だ。僕は石動が高校の同級生だという事を話した。違う人に交代させられるかと思っただが、

「その方がいい場合もある」

と統括官は僕に調査をするように言った。

早速、顧問税理士である近藤先生の事務所に連絡をする。

「お電話ありがとうございます、近藤税理士事務所です」

この前聞いた声の女の子が出た。確か藤村さんだ。妹さんだろうか？ でも彼女に妹がいるなんて聞いた事ないな……。いや、僕は彼女の事を全部知っている訳じゃないし。

「私、H税務署法人課税部門の尼寺と申します」

「いつもお世話になっております」

女の子は澁みなく話す。僕は、

「こちらこそ、先生にはお世話になっております」

と返し、本題に入る。

「実は、近藤先生の顧問先である石動建設さんの税務調査にお伺いしたいのですが、担当の方はいらっしゃいますか？」

「担当は只今外出中ですので、折り返しお電話させます」

受け答えは完璧だ。やっぱり妹さんだろうか？ また誘い水に向けてみる。

「ありがとうございます。私、尼寺と申しますが？」

「私、辻村と申します」

あ、何だ。辻村さんか。電話だと聞き間違えるな。

「よろしく願います」

僕は思わず苦笑いをして受話器を置いた。

（藤村さんの事ばかり考えているからだよ）

違う自分が窺^{たしな}める。そうかも知れない。

しばらく資料整理や報告書作成をしていると、近藤税理士事務所の担当者から連絡が入った。

「お電話代わりました、尼寺です」

何故か沈黙。そして、笑い声が聞こえる。どういう事だ？

「ああ、失礼しました。私、石動建設さんの担当をしております、東山と申します」

え？ 何だったの、今の笑い声？ それにしても、錦織さんではなくて、東山さんか。あと、植草さんで少年隊が結成できるな。

「石動建設さんの調査の件なのですが……」

僕は気を取り直して話を続けた。東山さんも錦織さんと同じで、すでに先方に確認済みらしく、日程は再来週の水木で決まった。

「では、失礼致します」

僕は受話器を置いた。それにしても、気になる。どうして彼女は笑っていたのだろうか？ まあ、いいか。僕は頭を切り替えようと、もう一度資料に目を通した。

そして、調査の日。僕は石動建設の事務所の前にいた。

（こんなに大きな会社だったのか。知らなかった）

三年前に土地を買い増しし、自社ビルを建てたようだ。この不景気に、随分と勢いがある。

それは決算書にも現れている。連続増収増益で、右肩上がり。受注内容を大きく変換したのが当たったという噂だ。僕は事務所のドアの前に立ち、ドアフォンを押した。

「おう、やっと来たな、尼寺」

いきなりドアが開き、高校の頃と少しも変わらない陰険そうな顔

で、石動が出て来た。但し、口ひげを生やし、嫌らしさが増していたが。

「や、やあ」

まさか僕の事を覚えているとは思わなかったので、すっかり面食らってしまい、そんな挨拶しかできなかった。

「まあ、座ってくれ。いろいろ話したい事があるんだ」

妙にテンションが高い石動。僕はようやく自分を取り戻し、

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

と身分証を提示した。何か間抜けだ。

「わかってるって。税理士さんからみんな聞いてるよ」

石動はそう言って、事務所の奥にあるソファに座っている女性を見た。あの人が東山さん？

「お世話になります、私、近藤税理士事務所の東山です」

東山さんは僕に近づいて来て、名刺を差し出した。錦織さんとは違い、アニメ声ではない。清楚な感じのするお嬢様タイプだ。長い髪、デザイン性の高い眼鏡。できる女性を印象付ける。藤村さんの「愛弟子」だろうか？ 名刺を見ると、「東山美奈」と書かれている。

「ほらほら、サッサと座れよ」

「は、はい」

僕はハッと我に返り、ソファに腰を下ろす。向かいに東山さんと石動が座る。

「美奈ちゃんに聞いたよ。蘭子と付き合ってるんだって？」

「は？」

美奈ちゃん？ 税理士事務所の担当者をちゃん付け？ しかも、藤村さん呼び捨て？

「高校の時と違って、随分と積極的になったなあ、お前」

事務所を見回すと、僕ら以外に誰もいない。社長はどうしたのだろう？

「あ、いや、藤村さんとは付き合っていないですよ」

「だって、毎週飲みに行ってるんだろ？」

高校の頃の石動を思い出してしまった。こいつはこんな風に僕を言葉で追い詰め、苛めていた。

「いえ、飲みには行ってますけど、付き合ってはいません」

「妙な事言っなあ。ねえ、美奈ちゃん？」

ここはキャバクラか？ そう思いそうになった。キャバクラに行った事はないけど。石動は腕を東山さんの後ろに回していた。触れてはいないが、まるで肩を抱いているように見える。

「あの、今日はそういう話をしに来たのではないので、帳簿類を見せていただけますか？」

「わかったよ。相変わらず、融通が利かない奴だな、お前」

石動は東山さんを見て、

「美奈ちゃん、出してあげてよ」

「はい」

東山さんは、慣れているのか、嫌な顔もせずに立ち上がり、隅に置かれた段ボール箱を運んで来る。辛そうだ。

「ああ、僕が運びますよ」

「すみません」

僕は東山さんから段ボール箱を受け取った。

「明日も来るんだっけ？」

石動が唐突に訊く。

「はい。調査は二日間の予定ですから」

「それなんだけどさ、俺、用事があつてさ。調査、今日だけにしてくれない？」

「え？」

今までたくさんの法人に調査に行ったが、調査日当日に予定変更を申し入れられた事はない。

「頼むよ。今度の女は、大本命でさ。明日、どうしても落としたいんだよ」

何だ？ 好きな女と会いたいから、調査を今日だけにしろだと？

何を思い上がっているんだ、こいつは？ 昔からそういう奴だったけど。よし、それならそれでいい。僕も作戦変更だ。

「わかりました。いいですよ」

「おお、やったあ！ ありがとな、尼寺。やっぱ、持つべき者は友達だなあ」

僕は啞然とした。お前なんか、友達じゃないよ。心の中でそう呟いた。

そして僕は通常の三倍、とは行かなかったが、とにかく大急ぎで帳簿をチェックした。どうやら、石動は、税金対策で役員になっているだけで、仕事はしていないようだ。報酬も控え目なので、問題にするほどではない。

（でも……）

おかしい。こいつが、年収三百万円で、役員になるだろうか？

そんな奴ではない。

「石動さん、今年度の出納帳を見せていただけますか？」

僕は賭けに出た。これで何も見つからなければ、この調査は明らかに失敗だ。

「待つて下さい。申告期限が経過していない事業年度の帳簿は、お見せする必要はないはずです」

さすが、東山さん。それを知っていたか。ピンチだ。

「いいよ、美奈ちゃん。ここで頑張っても、来年また来られれば、バレるんだから」

「え？」

東山さんは石動の言葉に呆然としていた。それはそうだろう。義務のない事を調査官が言っているのを阻止しようとしたのに、それを遮ったのだから。

「さあ、見てくれ、尼寺。俺の会社の悪行を、全部見つけ出してくれ」

「専務、それはどういう事ですか？」

東山さんは訳がわからないらしく、酷く慌てていた。

「いいんだよ、美奈ちゃん。君の所には迷惑をかけないから」

石動の顔は、来た時と違い、とても清々しくなっていた。どういう事だろう？ 僕も困惑した。

石動は調査の連絡を社長である父親に告げず、旅行を計画して、社員を皆出かけさせてしまったのだという。彼は父親の悪事を快く思わず、調査があると知った時、それを一切合財出してしまおうと思ったようだ。

昔の石動と全然違っていた。何があつたのだろうか？

「何も知らないでこのうと生きて来たのを、この会社の役員になつて知つたんだよ」

彼は自嘲気味に言つた。

「俺はこんな汚い金で育てられていたのかと思うと、本当に腹が立つた。親父が許せなかつたんだ」

「……」

僕は何も言えなかつた。

「尼寺、遠慮は要らない。全部曝け出しちまってくれ。親父に全うに生きる事を教えてやってくれ」

「わかつた」

僕は証拠となる書類を預かると、事務所を出た。

「尼寺」

石動が追いかけて来て、ドアのところで声をかけた。

「あの頃の事、許してくれ。俺は本当にバカだった」

「いや、別に僕は何とも思っていないから」

僕は心の底からそう言つた。石動は嬉しそうに微笑み、

「たまには同窓会にも顔出せよ」

「そうだね」

僕は会釈をして、歩き出す。

「蘭子とうまくやれよ！」

「だから、藤村さんはそういう関係じゃないって！」
蒸し返さないで欲しい。結構いい気分だったんだから。

僕が石動に託された書類は、驚愕の物だった。石動建設ばかりでなく、付近一帯の土建業界が吹き飛ぶのではないかという、とんでもない談合の証拠だったのだ。先輩が調べていた法人の、石動建設への貸付金は、その談合で生じた裏金だった。

石動の会社はどうなってしまうのだろうか？ 僕は後味が悪い思いをした。

「フーン。石動君ねえ」

いつもの居酒屋。そして、いつもの藤村さん。今日は豪華な事に、錦織さんと東山さんもいて、「三人官女」だ。

「キヤハハ、やっぱりお二人は付き合ってるんですね？」

飲むと豹変するタイプ。東山さんの変貌振りには驚いた。

「そうだよ、美奈ちゃん。知らなかったのお？」

錦織さんも酔っ払っている。

「うるさい、二人共！」

藤村さんの一声で、二人は正座し、黙り込む。凄い。

「そうなんだあ。ひげ生やしてたのかあ」

藤村さんには、調査の内容は話せないの、石動の近況報告だけした。多分藤村さんは、東山さんから全貌を聞いているだろうけど。
「うん」

「何か言ってた、石動君？」

トロンとした目で藤村さんが尋ねる。僕はギクツとした。すると東山さんが陽気に笑い出し、

「はい、言ってみましたよ。確かあ、『蘭子とうまくやれよ！』って言っていました」

何て事を！ あれ？ 藤村さん、寝てた。早い。

いくら呼びかけても起きない藤村さん。東山さんと錦織さんは、彼からのメールで帰って行った。また二人きりになってしまった。「またか」

溜息が出る。タクシー呼んでもらって、行き先を告げて……。な
どと考えていたら、

「うん？」

珍しく、藤村さんが目を覚ました。

「良かった、今日は自分で帰れそうだね」

僕はホッとして言った。すると藤村さんは、

「ごめん、尼寺君。いつもタクシー呼んでもらって。それも、お金
まで……」

彼女にそんな事を言われると、とても照れ臭い。

「仕方ないよ。藤村さん、寝たら起きないんだもん」

僕は藤村さんを宥めるつもりでそう言った。ところが、

「私が寝ている間に変な事してないわよね？」

と思わぬ反応が返って来た。

「えっ!？」

僕は仰天してしまった。藤村さんの目が、疑惑に満ちて行く。そ
んなあ。

「そ、そんな事する度胸、僕にある訳ないじゃないか……」

僕はやっとそれだけ言う事ができた。

「そんな事ができるくらいなら、とっくに告白してるよ……」

パニックも手伝ったのか、とんでもない事まで口にした。ハッと
して彼女を見るが、聞こえなかったのか、何か呟いている。

「ラストオーダーです」

店員が来たので、僕は、

「お勘定」

と声をかけた。

「えっ？ 今何か言った？」

藤村さんが話しかけた気がして振り向く。

「うっん、何でもない」

そう言つと、藤村さんは立ち上がった。

「カラオケでも行こうか、尼寺君」

「えっ？ 僕、もうお金あまり持っていないよ」

ビクツとして身を退く。彼女はニツとして、

「大丈夫。お姉さんに任せなさい」

と胸を張った。確かに生まれ月では藤村さんの方がお姉さんかも知れないけど。

そして結局、二時間歌い捲った藤村さんは、がぶ飲みしたカクテルと疲れのせいで眠ってしまった。

「あーあ」

今日はタクシー係はいらなかったと思つた僕が甘かった。

調査ファイル10 菅物産の場合

僕は尼寺務。^{あまぐらひとむ} H 税務署勤務の税務調査官だ。入所三年目を迎え、ようやく仕事にも慣れて来た。

僕はいつものように出勤して、机の上に書類を広げ、次の予定を確認しようとした。

「尼寺、ちよつといいか？」

上司である統括官が僕を呼ぶ。ドキツとする。いろいろな事が頭に浮かび、眩暈がして来そうだ。

「な、何でしょうか？」

僕は鼓動が統括官に聞こえるのではないかと恐れながら、近づいた。

「そんなに私が怖いのか、尼寺？」

「え、いや、そうではありません」

統括官がニヤリと言うさまは、まさにあの憧れの女性である藤村蘭子さんがダブる。

高校の同級生にして、調査官として完膚なきまでに叩きのめされた人。でも、僕にこの仕事を続けようと決意させてくれた人でもある。今は、本当に自分が彼女の事を女性として好きなのだと実感している程だ。

「実は、異動の話が来ているんだが」

統括官の言葉がずっと遠くで聞こえているような気がした。

異動？ 異動？ 「いどう」と言っても、席が変わるのではない事くらいは理解している。

「ど、どこにですか？」

僕はそこがどこであろうと受けるつもりでいた。そして、それをきっかけに、藤村さんに告白するつもりだ。そんな劇的な事でもなければ、「優柔不断が息をしている」と揶揄された僕は、決断する

事ができない。

「N税務署だよ」

「は？」

僕はこれはコントだろうかと思った。N税務署はこの隣の管轄の税務署だ。異動なんていう大袈裟な事ではない。

「そんなに驚くな、尼寺。これは正式な辞令ではない。N税務署の職員のご両親が亡くなってな。悪い事に、その職員は三人兄弟でN税務署勤務で、どうしても予定が捌き切れなくなってしまったんだ」という事は？」

僕は恐る恐る言ってみた。統括官はまたニヤリとして、

「緊急的な措置だ。明日から、N税務署に応援に行ってくれ。これは、あちらからの指名なんだよ」

「え？ 自分は指名されたのですか？」

ビックリした。どういう事だろう？

「理由は聞いていない。まあ、他所で仕事をするのもいい経験だ。行ってくれるな？」

「はい」

喜び半分、悲しさ半分だ。遠くに行くのではなかった事は嬉しかったが、これでは藤村さんに告白するきっかけにはできそうもない。それは僕が情けないだけなのだが。

僕はその日は雑用に追われ、仕事はほとんどできなかった。行く予定だった法人の調査先を先輩に引き継ぎ、その日は終わった。

そして翌日、僕は隣の市にあるN税務署に行った。

「申し訳ないね、山寺君」

法人課税部門の統括官が出迎えてくれた。その人は、H税務署の統括官の同期らしい。

「H税務署から来ました、尼寺務です。よろしくお願いします」

「あまでら」を強調して言った。しかし無駄だった。

「みんな、紹介しよう。H税務署の敏腕調査官の山寺君だ」とあっさり言われた。もうどっちでもいい。

「よろしくな、山寺君」

もうN税務署では、「山寺」でいい。観念した。

「早速で悪いのだが、調査に行つて欲しいところがある」

「はい」

ここに長時間いて、「山寺」を連呼されるくらいなら、法人調査に行つた方がマシだ。

「まず、今日はここに行つてくれたまえ」

「はい。自分一人ですか？」

僕は資料に目を通しながら尋ねた。

「もちろんだよ。君の良く知っている税理士の顧問先だからね」

「は？」

僕はその言葉にギクツとなり、もう一度資料を見た。

（実相寺沙織^{じっそうじ さおり}税理士事務所？）

驚愕のシナリオだ。こんなオチだとは思ひもなかった。藤村さんがいる事務所だ。確か、以前聞いた話では、職員は二人で、監査担当は藤村さんだけのはず。久しぶりに「現場で血が流れる」予感がして来た。よく考えてみたら、実相寺税理士事務所の住所は、N市だった。

「その事務所の監査担当の女の子は、以前H税務署管内の近藤税理士事務所にいたそうじゃないか。君も何度か調査で顔を合わせているだろう？」

もしかして、そのせいで僕は指名されたのか？ 頭痛がして来た。

「軽くひねって上げてくれ、山寺君」

統括官は、ニコニコと言う。ああ、何て事だ。軽くひねられたら、僕はどうなってしまうのだろう？ どうやら、僕が藤村さんに「軽くひねられた」情報は入っていないようだ。凄いプレッシャーを感じる。

「は、はい」

それでも、公務員の僕は、仕事をしなければならない。もしかすると、今日が僕の公務員生活最後の日になるかも、などと考えてしまった。

今まで何度も嫌な調査は経験して来たが、今日ほど嫌な調査はない。僕は思い足取りで、調査先の法人である「有限会社 菅物産^{かんぶつさん}」に赴いた。

そこは、食品卸を主な業務としている、流通会社だ。規模はそう大きくはない。大手の商社の一部を請け負って、問屋から小売店に運んでいる。メインは輸送になる。

「ごめん下さい。N税務署の者ですが」とインターフォンに言った。

「どうぞ、お入り下さい」

「はい」

誰もドアを開けに来てくれる事なく、僕は自分でドアノブを開け、中に入った。

「書類はそこにありますから、どうぞご自由にご覧下さい」

事務員らしき中年の女性がツツケンドンに言った。あれ？ 税理士事務所の人がいない。どういう事だ？

「あの、税理士事務所の方はいらっしやらないのですか？」

僕は恐る恐る事務の女性に尋ねた。

「いませんよ。調査立会い報酬は、顧問料とは別ですって言われて、社長が立会いを断ったんですよ」

「え？」

驚いた。そんな法人なんて聞いた事がない。何を考えているのだろうか？

「ですから、好きなように。私も、帳簿の事はわかりませんから、何も訊かないで下さいね」

「どういう事ですか？」

無責任な発言なので、僕はカチンと来て語気を強めて尋ねた。

「私だって、いきなり留守番頼まれたんですよ！ 今日だけこの事務員なんです。そんな事言われたって、どうしようもないです！」
女性に逆ギレされてしまった。

一体この法人は、どうなっているのだろうか？ 僕は呆れ返ってしまった。それでも調査をしない訳にはいかない。応接セットのテーブルの上に乱雑に出された書類の山に近づき、ソファに腰を下ろす。
「はあ」

僕は溜息を吐き、調査を開始した。

そして帰署時間が近づく。

顧問税理士の立会いを拒むような法人だけあって、とにかく帳簿は出鱈目だった。藤村さんの懐かしい字が書き込まれた付箋紙がたくさん貼り付けられたままだ。実相寺税理士事務所の名入りの封筒がたくさん紛れ込んでいる。皆封を開けてあったので、中身を確認すると、それは、

「帳簿の内容には当事務所は一切の責任を持ちません」

という内容だった。つまり、匙を投げられた訳だ。指摘された事を全く改善・訂正する事がなかったのだらう。藤村さんは、調査立会いを拒否してくれてホッとしているかも知れない。

「今度は、社長がいらっしゃる時に来ます。また連絡しますので、お伝え下さい」

僕は帰り際にそう言ったが、女性は、

「私にそんな事言わないで下さい。ここで貴方が来るのを待って、貴方が帰るまでいてくれと頼まれただけなんですから」

「……」

経営者が経営者なら、留守番も留守番だ。僕は彼女には何も言わず、

「失礼します」

と会社を出た。

僕は帰署し、統括官に報告した。

「そうか。そんなに酷いところだったのか」

「はい。あれでは、税理士の先生が可哀相です。どうする事もできなかったでしょうから」

統括官は僕を見上げて、

「ご苦労だったね、山寺君。明日は、もう少しまともな法人だと思
うよ」

「はい」

僕は統括官に頭を下げ、あてがわれた机で書類の整理と報告書の
作成をした。

今までの調査で、一番疲れた。そう、藤村さんに初めて会ったあ
の調査よりも。

そして、また居酒屋にいる僕。目の前には藤村さん。いつも通り、
眠っている。

彼女は、僕を信じ切っているのだろうか？ 普通、若い女性が、
男と二人きりで、ここまで眠り込むなんて考えられない。それとも、
僕の事なんか何とも思っていないから、寝てしまうのかな？

「あれ？」

藤村さんが起きてくれた。僕はホッとしたが、先日の事を思い出
し、

「今度はカラオケ行かないからね、藤村さん」

藤村さんはその言葉にバツが悪そうに微笑んだ。

「今日はお開きにしよう」

畳み掛けるように宣言する。すると藤村さんは、
「はい」

と素直に返事をしてくれた。良かった。何だか凄く可愛かった。も
ちろん、普段も可愛いけど。

タクシーを呼び、来るまで待つ。置いて行くと、また眠ってしま

いそうなので、僕は雪山で遭難した心境で藤村さんに話しかけ続けた。

「タクシー来たよ、藤村さん」

「え、うん……」

藤村さんはフラフラしながら外へ出る。

「危なっかしいな」

僕は藤村さんが心配なので、一緒にタクシーに乗った。行く先は何とか告げられたが、とうとう藤村さんは寝入ってしまった。

「困ったなあ」

いくら呼びかけても、全然起きてくれない。やがてタクシーは藤村さんのアパートに着いた。

「ここか」

初めて来た。何故か、ドキドキして来る。

藤村さんをおんぶして、彼女の部屋を探す。一階で助かった。でも、鍵がない。

「うーん」

その時、奇跡的に藤村さんが目を覚ました。

「藤村さん、鍵は？」

「ああ、開ける」

藤村さんはヒョイと僕の背中から飛び降りて、玄関の鍵を開けると、

「お休みなさい」

と言って、そのままそこに横になってしまった。

「藤村さん！」

近所の手前、あまり大きな声で呼びかけられない。

「全く……」

仕方なく、手探りで明かりのスイッチを押す。

「わあ」

一人暮らしの女の子の部屋。さすが藤村さんと言うくらい、奇麗に整頓されている。バストイレつき。家賃はいくらくらいだろう？

建物の耐用年数と減価償却費から換算して……。こんなところで悲しい職業病が出てしまう。

そんな事より、今は彼女をベッドに寝かせないと。

ベッド？　またドキドキして来た。今、目を覚まされたら、確実に僕は疑われそうだ。

「起きないでね、藤村さん」

僕は慎重に彼女を抱き起こして、所謂「お姫様抱っこ」で運ぶ。軽いな、彼女。何キロだろう？

おっと。セクハラか？

僕は妙な妄想をしないようにして、彼女をベッドに寝かせた。

「鍵は？」

玄関を見ると、そこに落ちていた。

「ふう」

ホッとしたのも束の間だ。

（この鍵、どうやって締めればいい？）

これは本当に困った。すると再び奇跡が起こる。

「ああ、ありがと、尼寺君。後は自分でするから」

突然起き上がった藤村さんに、僕は外に追い出された。

「ありがとね、尼寺君」

そう言っているが、彼女は間違いなく寝ぼけている。目が半分しか開いていない。

ガチャ。

無情に響くドアのロックの音。

もう僕にはなす術はない。仕方なく、

「お休み、藤村さん」

とだけ声をかけ、アパートを後にした。

そして僕は、藤村さんの事が気になって、一睡もできなかった。

でも翌日、

「昨日はごめん。今度は眠りませんので、懲りずに誘って下さい」と藤村さんがメールをくれた。僕は、

「こちらこそ、懲りずにお誘い下さい」と返した。

今度こそ。僕は決意した。そう、今度こそ、藤村さんに告白するぞ。

調査ファイル11 下山金型の場合

僕は尼寺務。H税務署勤務の税務調査官だ。

先日、隣のN税務署で人が足りなくなり、緊急的措置で僕が異動し、穴埋めをした。

「先方も喜んでいた。良くやってくれた、尼寺」

統括官に褒められたのは、いつ以来だろう？僕は嬉しくなつてついニヤついた。しかし、統括官の次の言葉で、顔が引きつった。

「だからという訳ではないのだが、お前に正式な異動の辞令が下りた」

「え？」

僕はポカンと口を開けたまま、しばらく言葉を発せられなかった。

「長野県のI税務署に異動だ。来月からな」

来月。七月。思えば、今月は異動の時期だった。

「どうした、尼寺？」

統括官はそんな僕の気持ちなど全く察してくれていない。

「国家公務員は、異動があるのは最初からわかっている事だろう？何を今更」

「あ、いえ、異動が不服なのではありません」

僕は慌てて言い訳した。

「何だ、彼女でもできたのか？」

統括官があまりに意外そうな顔で訊いたので、僕は少しだけ傷ついた。

「か、彼女なんていませんよ」

「そうか」

統括官は何故かニヤリとした。

「ならば身軽だな」

「はい」

僕はかしこまって返事をした。

「異動にはまだ時間がある。それまで、ここで悔いを残さぬように仕事をしてくれ」

「わかりました」

僕はお辞儀をして、統括官の席を離れ、自分の席に着いた。

（こんな形でいきなりその機会が訪れるなんて、運命かな？）

僕は、高校時代の片思いの人である藤村蘭子さんに告白しようと思っていた。「異動」のような劇的な事でもなければ、僕のような性格の男は一生決断できない。もし、そんな機会が訪れたら、絶対に藤村さんに告白しよう。そう決めていたのだ。

（それを運命と思うなんて、思い上がりだ）

相手がある事なんだぞ。調子にかけている自分を、別の自分が咎める。

そして、通常の業務に入る。異動の事で頭がいっぱいになって来て、気がつくと調査先の法人の前にいた。

「下山金型さんか」

一時は、かなり隆盛を極めていた会社だが、代替わりして業績不振に陥ったらしい。二代目の若社長が、所謂「バカ社長」らしく、畑違いの業種にてを出したのが躓^{つまづ}きの始まりのようだ。

「どうしてウチになんか調査に来るんですか？」

調査の連絡をした時、社長にそう言われた。その段階で、下山金型は税理士の顧問契約を解除しており、知らないでその税理士に電話してしまった僕は、下山金型の担当者だった人に嫌味を言われた。どうにも嫌な感じがする法人なのだ。先日、N税務署の手伝いで行った菅物産のような事になったら困る。それだけは勘弁して欲しいと思った。

ところが、それ以上に僕を驚かす事が待ち受けていた。

「お待ちしました」

「本日臨時休業いたします」という手書きの紙が貼られた事務所

のドアを勢い良く開いたのは、藤村さんの愛弟子を自称する錦織つばささんだった。

「あれ？」

僕は思わずそう言ってしまった。錦織さんはケラケラ笑って、

「ウチが、調査立会いだけをお受けしたんですよ。で、尼寺さんが来るって聞いたので、私が来ました」

「はあ？」

僕は啞然としてしまった。久しぶりのアニメ声の攻撃に頭が混乱しそうだ。

「H税務署法人課税部門の尼寺です」

僕は身分証を提示し、錦織さんの後ろから現れた下山社長に挨拶した。

「社長の下山です」

僕は下山社長に促され、ソファに座った。

「電話でもお話しましたが、ウチは本当に赤字企業ですよ。どうしても調査なんかに来るのですか？」

社長は不満をぶちまけて来た。僕は愛想笑いをして、

「今回は、反面調査と言いまして、こちらの調査が主ではないのです。他社に関連して、調べたい事がありました」

反面調査とは、要するに裏取りだ。別の法人の調査をして、ある取引の裏を取りたい時に行うものである。

「なるほど。では、ウチに何かあったという訳ではないのですね？」
「ええ、そうですね」

僕はそう答えながら、不審に思った。何だろう？ どうしてそんな事を訊くんのだ？ 大体、この調査が反面調査だってことは、取引先からの連絡で承知しているはず。もちろん、税務署側がその事実を明かす事はないから、知っているだろうという推測に過ぎないが。
「では、帳簿類を見させていただけますか？」

「はい」

アニメ声が響く。頭がキンキンする。決して、錦織さんが嫌な人

だとは思わないけど、やっぱりあの声は苦手になってしまった。以前は可愛いと思っただけ。

「どうぞ、尼寺さん」

僕の脇に段ボール箱いっぱい帳簿が置かれた。錦織さんは、ニコニコして下山社長の隣に座る。

「尼寺さんて、錦織さんとお知り合いなんですか？」

下山社長がいきなり訊いて来た。すると錦織さんが、

「はい、以前別の会社の調査でお世話になった事があります。それと、私の先輩が、尼寺さんの彼女なんです」

「ほオ。そうなんですか」

何も知らない下山社長は、すっかり信じてしまった。僕は慌てて「以前調査でお会いしたのは事実ですが、錦織さんの先輩は、私の彼女ではありません」

「あれ、そうなんですか？」

錦織さんはもの凄く意外そうに言った。

「まあ、その辺の細かい事はいいですよ。いずれにしても、貴方と錦織さんはお知り合いなんですよね？」

下山社長の顔に狡猾な色が浮かぶ。何だ？

「なら、調査したけど何も出なかった、という事で、本日はすませませんか？」

「！」

そういう事か。やっぱりこの社長、何か隠しているな。臨時休業の状態も妙だと思っただけ。

「社長、そんな事言ったらダメですよ。逆効果ですよ」

錦織さんはニコニコしたままで下山社長を窺^{たしな}めてくれた。しかし社長は、

「いやいや、そんな建前はいいですから、錦織さん。世の中、そうやって折り合いをつけてこそ、うまく行くものです」

といい、僕を見る。嫌な目だ。人を垂らし込もうという心の底が見えるようだ。

「社長、失礼ですが、そんな事を言われるという事は、何か隠した
い事があるのですか？」

僕は怯まずに尋ねた。下山社長は、「バカ社長」ではないようだ。
強かなのだ。

「まさか。勘繰り過ぎですよ、尼寺さん」

彼は僕の名前もしっかり把握している。本当はかなりの切れ者だ。
こいつは迂闊な事はできないぞ。

「そうですね。失礼しました」

僕は、ここは一旦引き下がり、本調査の方をもう一度じっくりす
るべきと判断した。

そして僕は、一通りの確認をすませ、昼前に事務所を出た。

「何だあ、ご馳走してもらおうと思っただのにイ」

アニメ声でそんな事を言われると、余計頭痛がして来る。錦織さ
んが寂しそうな顔で見送ってくれた。何だか、悪い事をしたような
気がしてしまうが、そもそも税務署の調査官が、法人の顧問先の税
理士事務所の担当者に食事をご馳走するのは問題なのだ。別に何も
悪い事はしていない。そう自分に言い聞かせて、僕は帰署した。

僕の予想通り、下山金型の取引先は、下山金型に空の請求書を書
かせて架空の経費を捻出し、その支払に当てたはずの金をプールし
ていた。下山金型の請求書のナンバーを控え、それを突き合わせて
発覚する程度の拙い手口だった。

多分、H税務署ではこの調査が最後だ。これからは異動のための
準備が始まる。

いつもはそんな事はないのに、今日是指が震える。

「明日、いつもの居酒屋で飲みませんか？ 但し、錦織さんと東山
さんは誘わないで下さい」

僕は何度も本文を読み直し、藤村さんの携帯に送信した。

できるのか、告白？ もうドキドキして来た。

そして当日。

いつもの座敷で待っていると、藤村さんがやって来た。

「今晚は」

藤村さんがいつにも増して綺麗に見える。胸が高鳴る。

「こ、今晚は」

変な緊張感が僕をぎこちなくしている。何となくだが、藤村さんの目が不審そうだ。

「今日は絶対に眠らないから、よろしくね」

藤村さんはニッコリして、僕の向かいに座る。僕は居ずまいを正して、

「うん。今日は本当に眠らないで欲しいんだ」

「そう？」

そしていつものようにどうという事はない二人だけの飲み会が始まる。「二人だけ」と言うと、何か良い感じの響きだが、そんな事は微塵もない。

気がつくと、僕は飲めないはずのビールを飲み干していた。藤村さんがポカンとした顔で僕を見ている。

「大丈夫、尼寺君？」

藤村さんが心配そうに尋ねてくれた。

「だ、大丈夫。平気だから」

そう言いながらも、顔が火照っているのが自分でもわかる。今日は僕が潰れる番だろうか？

「あ」

気がつくと、僕はいつの間にか寮に戻っていた。もう深夜の二時だ。

「うわあ」

何がどうしたのか、全くわからない。どうしよう？ 藤村さんに

後で連絡しようか？

「あ」

携帯にメールが来ている。藤村さんからだ。

「うわ」

思わず叫んでしまった。

「今度はアルコール抜きでお話しましょう」

藤村さん、怒ってるのかな？ でも怒っているのなら、こういうメールはよこしてくれないよな。

でも、僕は藤村さんに何を話したのだろうか？ その方が心配だった。

いずれにしても、時間がないんだ。異動の前に告白する。それだけは何としても成し遂げよう。

調査ファイル12 最終章

僕は尼寺務。H税務署勤務の調査官だ。

先日、上司である統括官から異動の辞令が下りた事を告げられた。そして、それに後押ししてもらった形で、高校時代の、いや、高校時代からの片思いの人である藤村蘭子さんに告白する事にした。

どうにか居酒屋に舞台を設定して、いざ藤村さんに告白しようと思気込んだのだが、あまりの緊張に飲めないビールをあおってしまった、途中から記憶を失ってしまった。

後で送られて来た藤村さんのメールを見る限り、僕は何も言えなかったようだ。本当に情けなくて、涙が出そうだった。

翌日から、僕は引継ぎやら何やらで忙しく、藤村さんにお詫びの電話もできずにいた。メールで済ませるのは気が引けたので、電話で言おうと思っていたのだが、想像以上に残務整理と異動準備に時間を取られ、思うようにできず、もどかしかった。

「どうした、尼寺？ 元気がないな」

統括官が廊下で後ろから声をかけて来た。

「そ、そうですか？」

僕は目の下にできた隈を自覚しないまま、統括官を見た。統括官は呆れ顔で、

「異動する前からそんな調子では、先が思いやられるぞ、尼寺。何か悩み事でもあるのか？」

「いえ、その、個人的な事ですから……」

僕は統括官に恋の悩みを相談しても仕方ないと思い、そう言った。すると統括官は、

「あのなあ。身も蓋もない言い方をするなよ。これでも、職場では親代わりのつもりなんだぞ」

「ああ、申し訳ありません」

僕は統括官のその言葉で反省し、相談してみた。

「そうか。なるほどな」

やはり、いくら統括官でもこんな個人的な悩みは解決しようがないだろう。そう思っただけを聞いてもらったお礼を言おうとした時、
「少なくとも彼女は、お前を嫌ってはいないぞ、尼寺」

「は？」

どうしてそんな事がわかるの？

「私の経験では、もし、本当にお前の事が嫌いなら、メールもよこさないだろうし、飲みに行ったりしないはずだ。そうだろう？」

「はあ」

僕はそんな楽天的に考えられないので、あいまいな返事をした。

「お前のいけないところは、何でも後ろ向きに考えるところだ。もう少し、自分に自信を持て。いや、恋愛に関しては、少し自信過剰で構わんと思う」

「え？ そうなんですか？」

統括官はニヤリとして、

「そうだよ。それくらいでないと、女性の心は掴めんど、尼寺」

「はあ」

それでも僕は後ろ向きだった。

「何より、そんな状態のままでは税務署に行かれたら、あちらにも迷惑がかかる。万全の態勢にして、異動する事だ。いいな？」

統括官の業務命令張りの言い回しに、僕は直立不動になり、

「はい！」

と答えた。

そうは言っただけで、相変わらず自信がない。藤村さんに鼻で笑われて終わりのような気がしてしまい、決断ができない。それに、先日、記憶を失くしていた間、僕は本当に彼女に何も言わなかったのか、心配だ。

僕はモヤモヤしたまま、署を出た。そのまま寮に帰る気にもなれず、街に足を向ける。ばったり藤村さんと会ったらどうしようなどと考える余裕すらなかったのだ。

藤村さんとは会わなかったが、ある意味それ以上に会いたくない人達と顔を合わせてしまった。

「あれえ、今日は一人なんですか、尼寺さん？」

アニメ声が辺りに響く。尼寺という奴はどいつだ、という感じで、周囲にいる人達が見回す。

「はあ」

僕は思わず溜息を吐いた。

「ああ、ひつどい、尼寺さんてば。今、溜息吐いたでしょ？」

僕は仕方なく声の主の方を見た。そこには、アニメ声の錦織さんと、深窓の令嬢風でいて、その実酒乱の東山さんがいた。二人共、妙に嬉しそうな気がする。

「あ、こ、こんにちは」

僕は顔を引きつらせながら言った。すると東山さんが、

「そうだ、お祝い言わなくちゃ。おめでとうございます」

「は？」

唐突にそんな事を言われると、何に対してなのか全然わからない。まさか、僕が異動なのを知っていて、嫌味を言ったのか？ でも、そんな事知ってる訳ないしなあ。変だ。東山さんはそれでもニコニコしたままで、

「先輩にプロポーズしたんですね？」

「は？」

プロポーズ？ 先輩？ 藤村さんの事？ どこでどう間違えると、そんな話になるんだ？

「し、してないですよ、まだ……」

まだとか言ってしまった。僕は頂垂れた。してやったり顔の東山さんと錦織さんは、ハイタッチをして喜んでいる。

「ここでは何ですから、どこかに入りましょうよ、尼寺さん」

「はあ」

確かに、錦織さんの特徴のある声のせいで、人だかりができていたので、僕達は近くのファミレスに入った。

「わーい、ご馳走、ご馳走」

錦織さんがはしゃぎながら席に着く。

「あ、その、僕、持ち合わせがないので……」

慌てて「自主申告」すると、東山さんが、

「そんな失礼な事しませんよ、尼寺さん。今日はお祝いなんですから、私達が出しますよ」

「いや、だから、プロポーズなんてしてないですから、お祝いもいいですよ」

僕は慌てていた。もしこのまま彼女達の「接待」を受けた事が藤村さんの耳に入れば、相当気分を害する事になる。それだけは困るのだ。

「でも、いずれするんですよ、尼寺さん？」

東山さんが真剣な表情で言う。僕はビクツとした。

「だったら、何も問題ないじゃないですか。お祝いしちゃってOKですよ」

錦織さんがメニューを広げた。

「いや、その、藤村さんの事を無視して、僕だけ勝手にお祝いって訳にはいかないですよ」

僕は何とか冷静になろうと努力しながら、二人を説き伏せようと頑張った。ところが、

「だって、先輩、毎日嬉しそうなんですよ」

錦織さんも真顔で言う。

「は？」

僕はキョトンとした。錦織さんはまたニコツとして、

「実はですねえ、私、尼寺さんが先輩に告白しているのをこっそり見ていたんですよ、あの居酒屋で」

「えええっ!？」

僕は仰天した。錦織さんに見られていたという事実より、僕が藤村さんに告白したという事実が衝撃だった。酔った状態で、藤村さんに告白していたのか……。だから、彼女は、

「今度はアルコール抜きでお話しましょう」

とメールを送って来たのか。あれ？ という事は？

「あの日以来、先輩がニヤついていているのを何度も見てるんです。聞いても誤魔化されちゃうんですけど、丸分かりですよ」

東山さんが言った。そうなのか。そうなんだ。

「アハハ、わかりやすいなあ、尼寺さん。急に嬉しそうな顔になった！」

錦織さんに指摘され、僕は顔が火照るのを感じた。

「先輩は、待ってるんですよ、尼寺さん」

東山さんも微笑んでいる。

「今度は、ノンアルコールで告白タイムですよ、尼寺さん」

錦織さんがVサインを出して言ってくれた。僕は泣きそうなくらい嬉しくなったので、

「今日はやっぱり僕がご馳走しますよ」

「わーい！ 一食助かるウ」

錦織さんは現金だ。東山さんは、

「そういう訳には行きません。ご馳走すると言ったのですから、私達が支払をします」

「美奈ったら、変なところで強情なんだから」

錦織さんは口を尖らせた。どうやら彼女はご馳走はするよりされる方がお好みらしい。

「まあまあ。今回は僕が出しますから」

東山さんも折れてくれた。そして僕は、財布が空になった。

錦織さんと東山さんは、その後カラオケに行くらしかったが、僕は丁重にお断りして、寮に帰った。

藤村さんが、僕の告白を待っている。その可能性は百パーセントではないが、光は見えた気がした。たまには楽天的になってみようかな？ そう思った。

そして翌日。

今日も引継ぎ書を作成したり、報告書を上げたりで、大忙しだ。異動がこれほど骨が折れるものだとは思っていなかった。しばらくしたくないな、と思ったほどだ。

今日のメインイベントはこれからだ。僕は署を出ると、携帯を取り出した。そして、藤村さんの携帯にかける。

「はい」

藤村さんの声は弾んでいるように思えた。気のせいだろうか。

「ふ、藤村さん、話があります。これから会えませんか？」

僕はつつかえながらも何とか言い切った。

「ええ。どこですか？」

藤村さんの声が不審そうだ。それはそうだな、唐突過ぎる切り出し方だもんな。

「税務署の近くにコーヒーショップがあります。そこで待ってます」
それでも僕は、押しの一手で続けた。

「わかりました」

何だか事務的な口調だ。藤村さん、本当に僕の告白を待ってくれていたのだろうか？ たちまち不安になってしまった。しかし、もう言ってしまったのだ。今更後戻りはできない。

「よし！」

僕は意を決してコーヒーショップに向かった。

コーヒーショップの窓際の席で向かい合って座る僕と藤村さん。何かとても緊張して来た。

「すみません、急に呼び出して」

乾き切った口を何とか開いた。喉が焼けるようだ。

「いえ。何でしょうか？」

藤村さんの態度は、まるで調査立会いの時のようで、だんだん自信が失われて行く。不安だ。

「この前は、酔い潰れてしまつて、申し訳ありませんでした」

とにかく、詫びておかなければならない。本題はその後だ。

「その事なら気にしないで、尼寺君。私が散々迷惑をかけているんだから」

藤村さんは苦笑いした。あ！今の僕の言葉、嫌味だったかな？

「はあ」

頭を掻いて引きつりながら笑う。藤村さんの表情がちょっとだけ変化した気がした。

「あの」

僕は居ずまいを正して藤村さんを見た。

「はい」

藤村さんも僕をじっと見つめている。うわあ、心臓が破裂しそうだ。

「僕、実は今月で異動になるんだ」

よし、うまく言えた。

「え？」

藤村さんは意外そうな顔をした。それはそうだね。

「長野県の工税務署に行く事になったんだ。それで、どうしても、その前に藤村さんに話しておきたい事があつて……」

藤村さんはスツと背筋を伸ばした。僕も緊張する。

「藤村さん」

僕は真っ直ぐ藤村さんを見た。ああ、綺麗な人だ。こんな美人に告白しようだなんて、今更ながら身の程知らずな気がして来る。藤村さんも目を逸らさないで、僕を見つめてくれている。

「貴女の事が好きです。僕と付き合っていただけませんか？」

言えた！言えたぞ！心の中でガッツポーズをした。

「え？」

ギクツとした。藤村さんが泣いている。わわ！　しくじったか？
「藤村さん、泣かないで。ごめん、僕が急に変な事を言ったから…」

…」

僕はすっかり気が動転してしまった。すると藤村さんはニコツとして、

「違う。違うの、尼寺君。嬉しいの。嬉しいから、泣いてるのよ」
「……」

僕は固まった。動けなくなった。藤村さんが、涙を拭いながら、
「尼寺君？」

でも僕は硬直したままだ。反応しようにも、身体が言う事を聞かない。

「尼寺君！」

藤村さんのその凜とした声で、僕はようやく硬直が解けた。

「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

藤村さんが言った。

「藤村さん……」

今度は僕が泣いてしまった。恥ずかしいなんて思う余裕がなかった。号泣した。

「ああ、尼寺君！」

藤村さんも泣いている。ああ、夢じゃない。夢じゃないんだ。僕はようやく喜びを噛み締める事ができた。

「どうぞ、遠慮しないで」

告白したその日に藤村さんのアパートに行くなんて、彼女のご両親に知られたら怒られそうだ。

「は、はい」

僕はドキドキして靴を脱いだ。ここは二度目だけど、前回とは緊張感が違う。

「これから、忙しくなるわね、尼寺君」

「あ、うん、そうだね」

さつきからずっと上の空で返事をしている気がした。それでも何とか、

「藤村さんに、一緒に来て欲しいなんて、とても言えないし、こんなタイミングで告白したのを申し訳ないと思ってます」

僕は頭を下げた。藤村さんは笑って、

「大袈裟よ、全く。きっかけが欲しかったんでしょ？」

「うん……」

僕は恥ずかしくなった。藤村さんはクスツと笑って、

「私と一緒にには行けないけど」

「やっぱり……」

わかっていたけど、そう言われると落ち込むなあ。まあ、無理に決まってるのだから、それは僕の身勝手というモノだ。

「一緒にには行けないけど、いろいろ片付けたら、追いかける」

藤村さんが、本当に軽く言った。

「え？」

僕は多分、呆けたような顔をしていたと思う。藤村さんはクスツと笑って、

「何よ、後から行くと迷惑なの？」

「そ、そんな事ないよ！」

あれ、何か、懐かしい感じのやり取りだ。僕は調子に乗ってみた。

「あ、あの」

「何？」

藤村さんがギクツとした顔で僕を見上げた。僕が嫌らしい事を考えたと思うたんだろうな。

「抱きしめていいですか？」

言い出しにくい状況だったけど、何とか言えた。藤村さんは笑い出して、

「はい」

僕は心臓が壊れるんじゃないかと思うくらいドキドキしながら、

彼女を抱きしめた。ああ、女の子っていい匂いがするし、こんなに柔らかいんだ。

「尼寺君」

「藤村さん」

藤村さんが僕を見る。

「ねえ、苗字で呼び合つの、やめにしない？」

「え？」

ドキツとした。

「ね、務」

僕は卒倒しそうだった。藤村さんが僕の名前を呼んでくれた。そう思うだけで、頭がパンクしそうだ。

「ら、蘭子さん」

僕も思い切って言った。

「だから、さんは付けない！」

いきなりのダメ出し。

「は、はい！」

ああ。やっぱりこんな感じなのかな、僕達って……。

その日はもちろん、寮に帰った。いくら何でも、いきなりのお泊りはまずい。

そして数日後、僕は長野へと出発する事になった。藤村さんは駅まで見送りに来てくれた。

「私も、片づけがすんだら、すぐ行くから」

「慌てなくていいよ、蘭子さん」

「だから、さんは付けない！」

「あ、はい！」

そんな感じで、僕は長野を目指した。

工務署は、今までいたH税務署に比べると、法人軒数は十分の

「にも満たない。毎日が長閑^{のびやか}で、ゆったりとしていた。
「どうかね、尼寺君。こっちの暮らしは慣れたかね？」

統括官が言った。

「はい、おかげさまで、すっかり順応できました」

僕は笑顔で答えた。

「そうかそうか。それは良かった。H税務署に比べると、随分と寂しいだろうが、頑張ってくれたまえ」

「はい」

周囲の人達は皆良い人ばかりで、本当に安心した。

そしてその日の業務は終了し、僕は署を出た。本来なら、寮に入るべきなのだが、

「後から彼女が来るので……」

と恥ずかしいのを我慢して統括官に事情を説明し、アパートを借りた。

「あれ？」

アパートが見えるところまで来ると、僕の部屋に明かりが点いている。

「ああ！」

僕は駆け出した。こんなにも心地良いのは生まれて初めてだ。

「只今」

玄関のドアを開くなり、言った。

「お帰りなさい、務」

蘭子さん、あいや、蘭子が料理をしながら、僕を迎えてくれた。

「来るのなら、連絡してくれば良かったのに」

「驚かそうと思ったのよ」

蘭子は屈託のない笑顔で言う。

「そう？ ああ、いい匂い」

「母に教えてもらった藤村家のお袋の味よ。美味しいんだから」
蘭子は嬉しそうに言った。僕もニコツとして、

「おお、じゃあ、期待しちゃうぞ」

「任せときなさい！」

彼女はポンと胸を叩いた。

これから始まるんだ。僕と蘭子の、新しい人生が。夢のよう
だけ、夢じゃない。

本当にありがとう、蘭子。絶対に幸せになろうね。

調査ファイル12 最終章（後書き）

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8946k/>

新米税務調査官尼寺務の奮闘日記

2011年10月27日03時27分発行